

松 山 大 学 論 集  
第 35 卷 第 5 号 抜 刷  
2 0 2 3 年 12 月 発 行

## 森本三義学長と松山大学の歴史（下）

川 東 暉 弘

# 森本三義学長と松山大学の歴史（下）

川 東 埴 弘

## 目 次

はじめに

- 1) 2007（平成 19）年 1 月～3 月
- 2) 2007（平成 19）年度
- 3) 2008（平成 20）年度（以上、前々号）
- 4) 2009（平成 21）年度
- 5) 2010（平成 22）年度（以上、前号）
- 6) 2011（平成 23）年度（本号）
- 7) 2012（平成 24）年度

おわりに

## 6）2011（平成 23）年度

森本学長・理事長 5 年目である。薬学部 6 年目、完成年度の年である。

本年度の校務体制は、副学長は墨岡学（2011 年 1 月 6 日～2012 年 12 月 31 日）、安田俊一（2008 年 6 月 26 日～2012 年 12 月 31 日）が続けた。経済学部長は新たに中嶋慎治（2011 年 4 月～2012 年 3 月）が就任した。経営学部長は平田桂一（2008 年 4 月～2012 年 3 月）、人文学部長は奥村義博（2010 年 4 月～2012 年 3 月）、法学部長は妹尾克敏（2008 年 4 月～2012 年 3 月）が続けた。薬学部長は葛谷昌之（2006 年 4 月～2011 年 5 月 31 日）が 5 月 31 日まで続けたが、6 月 1 日、新たに加茂直樹（2011 年 6 月 1 日～2012 年 3 月）に代わった。短大学長は清野良栄（2009 年 4 月～2015 年 3 月）が続けた。大学院経済学研究科長は入江重吉（2010 年 4 月～2012 年 3 月）、経営学研究科長は平田桂一（2010 年 4 月～2012 年 3 月）が続けた。社会学研究科長は新たに小松洋が就任

した（2011年4月～2013年3月）。言語コミュニケーション研究科長は岡山勇一（2009年4月～2012年3月）が続けた。図書館長は藤井泰（2011年1月～2012年12月）、総合研究所長は中村雅人（2011年1月～2012年12月）、副所長は倉沢生雄（2011年1月～2012年12月）が続けた。教務委員長は新たに明照博章（2011年4月～2013年3月）が就任した。入試委員長は松尾博史（2010年4月～2012年3月）が続けた。学生委員長は新たに小西廣司（2011年4月～4月30日）が就任したが、5月1日から松本直樹に代わった（2011年5月1日～2014年3月）。

学校法人面では、常務理事は、事務局長で理事の西原友昭（2010年4月～2017年3月）、事務部長で理事の岡村伸生（2010年4月～2014年12月31日）、副学長で理事の墨岡学（2007年1月～2012年12月31日）、評議員理事の松浦一悦（2011年1月14日～2014年12月31日）が続けた。理事は副学長の墨岡学、事務局長の西原友昭、事務部長からの岡村伸生、森林信、評議員から、田中哲、葛谷昌之、松浦一悦が続けた。設立者から新田元庸、温山会から麻生俊介、今井琉璃男、野本武男、学識者から一色哲昭、大塚潮治、水木儀三であった。監事は、新田孝志（2008年1月1日～）、金村毅（2009年6月～2015年5月31日）、島本武（2011年1月1日～2014年12月31日）であった。評議員は、教育職員は、今枝法之、加茂直樹、河瀬雅美、増野仁、松浦一悦、松尾博史、間宮賢一、川東埜弘（2011年3月16日より）の8名、事務職員は岡田隆、浜岡富雄の2名、事務局長及び部長は西原友昭、森林信、岡村伸生、藤田厚人の5名。後、副学長、学部長、短大学長の8名、温山会の7名、学識者の11名であった<sup>1)</sup>

4月1日、本年も次のような新しい教員を採用した<sup>2)</sup>

---

1) 『学内報』第412号、2011年4月。

2) 同。

## 経済学部

赤木 誠 1975 年生まれ，一橋大学大学院経済学研究科博士課程。  
講師として採用。西洋経済史。

## 経営学部

田村 公一 1960 年生まれ，京都産業大学大学院経済学研究科博士課程。教授として採用（新特任）。商学，マーケティング論。

丹生谷吉昭 1948 年生まれ，松山商科大学大学院経済学研究科修士課程。教授として採用。情報と職業。

古山 滋人 1978 年生まれ，関西大学大学院工学研究科博士課程。准教授として採用。品質システム論。

松田 圭司 1956 年生まれ，香川大学大学院工学研究科博士課程。准教授として採用（新特任）。情報科学。

柴田 好則 1982 年生まれ，神戸大学大学院経営学研究科博士課程。講師として採用。経営管理論。

松下 真也 1982 年生まれ，一橋大学大学院商学研究科博士課程。講師として採用。簿記原理。

## 人文学部

小川 直義 1945 年生まれ，関東学院大学大学院文学研究科博士課程。教授として採用。リーディング。

栗田 正己 1948 年生まれ，広島大学教育学部。教授として採用。地理。

矢次 綾 1966 年生まれ，名古屋大学大学院国際言語文化研究科博士課程。教授として採用。比較文化論。

金 菊熙 1971 年生まれ，東京大学大学院総合文化研究科博士課程。准教授として採用。ハングル。

森岡 千穂 1973 年生まれ，東京大学大学院人文社会系研究科博士課程。講師として採用。社会学，メディア論。

## 法学部

- 佐藤 孝之 1976年生まれ、日本体育大学大学院体育科学研究科博士課程。准教授として採用。体育。
- 今村 暢好 1977年生まれ、明治大学大学院法学研究科博士課程。講師として採用。刑法。
- 服部 寛 1980年生まれ、東北大学大学院法学研究科博士課程。講師として採用。法哲学。
- 牧本 公明 1978年生まれ、青山学院大学大学院法学研究科博士課程。講師として採用。憲法。

## 薬学部

- 栗原 健一 1964年生まれ、東京理科大学大学院薬学研究科修士課程。准教授として採用。有機化学。

本年度から、大学の公文書において、校訓「三実主義」の順序に大きな変更があった。

4月1日発行の『学内報』第412号（2011年4月）は、校訓「三実主義」の順序について、それまでの「真実・忠実・実用」から「真実・実用・忠実」に変更された。その理由についての説明はなされていない。なお、「三実主義」の説明文そのものは、1962年4月の星野通学長の説明と同じで、変更はなかった<sup>3)</sup>

また、本年度の学生向けの『学生便覧』も、校訓「三実主義」の順序が、それまでの「真実・忠実・実用」から「真実・実用・忠実」に変更された。そして、本年度の『学生便覧』から、それまでにはなかった、校訓「三実」の意味の解説がなされた。校史の重要な変更なので、引用しておこう。

---

3) 『学内報』第412号、2011年4月。

## 「■建学の精神

## 校訓 三実主義

松山大学は松山高等商業学校初代校長・加藤彰廉先生が創唱し、第3代校長・田中忠夫先生によりその意義が確認協調〔強調〕された「三実主義」という建学の精神ともいうべき校訓を掲げています。

88年の学園の歴史とともに生きて今日に至った人間形成の伝統的原理で、本学あるいは前身の松山高等商業学校、松山経済専門学校、松山商科大学の卒業生が、中央、地方に高い人間の評価を受けているのはこの校訓の訓化〔薫化〕によるところが大きいといえます。

三実とは、「真実」、「実用」、「忠実」の三つの「実」で、それぞれ次のような意味を持っています。

## 真実 (truthful)

真理に対するまことである。皮相な現象に惑溺しないで、進んでその奥に真理を探り、枯死した既成知識に安住せず、たゆまず自ら真知を求める態度である。

## 実用 (useful)

用に対するまことである。真理を真理のままに終わらせないで、必ずこれを生活の中に生かし、社会に奉仕する積極進取の実践的態度である。

## 忠実 (faithful)

人に対するまことである。人のために図っては己を虚しうし、人と交わりを結んでは終生操を変えず、自分の言行に対してはどこまでも責任をとらんとする態度である。

## 「校訓三実」の意味

「真実」「実用」は学びの態度、「忠実」は人としてのあり方を示しています。

「真実」とは、既存の「知」に満足することなく、真理を求めるために自ら学び、究め続けようとする態度です。氾濫する情報に惑わされること

なく、その中から客観的事実を見出し、真理を見極めることが肝要です。

「実用」とは、単に「すぐ役に立つ技術を学ぶ」という実用主義的な側面を指しているものではありません。「知」を単に知識として学ぶだけでなく、自らの生活や仕事の中に活かすべく、常に現実的な問題を念頭に置きながら学ぶ態度を示しています。大学での学びで得た知識を日常的生活の中にも積極的に活かしていくこうした態度は、松山大学における学びの特徴として授業の中にも活かされています。

「忠実」とは、人間関係や社会において、人としてとるべき態度を示しています。人は一人では生きていくことはできません。友人・家族・組織といった、広い意味での社会生活において、他者と誠実に向き合い、嘘偽りのない信頼関係を築くためには、倫理的な態度はもとより、積極的に人と交わり、自らを謙虚に、そして互いの意見を尊重し共有しようとする態度が重要です。「忠実」の精神は松山大学のあらゆる人間関係の基本として共有されています。

「校訓三実」は松山大学の学生・教職員が拠り所とすべき教訓ですが、人生を生きていく確かな指針でもあります。学生の皆さんには、大学卒業後も「本学の卒業生」として生涯この態度を持ち続けていただくことを願っています。】<sup>4)</sup>

この『学生便覧』の校訓の解説について、少しコメントしておこう。

- ①文章中、校訓「三実主義」と校訓「三実」の2つの表記がある。森本学長は、校訓「三実主義」でなく、主義を取り、校訓「三実」に統一して表現していたのだが、公文書にはまだその方針が十分には徹底していなかったようだ。
- ②校訓「三実」の順序について、これまでの「真実・忠実・実用」を「真実・実用・忠実」に変更した。しかし、ここでも理由の説明がなされていない。

---

4) 『2011年度学生便覧』

すでに述べたが、加藤彰廉校長の順序は「実用・忠実・真実」、田中校長の順序は「真実、実用、忠実」、戦後の星野通学長の順序は「真実、忠実、実用」であり、それらの順序にはそれぞれ歴史的な理由があった。今回順序を変更したのは、それを無視したもので、根拠がないものであった。

- ③「校訓三実」の意味について、新しい解説を行ない、「真実」と「実用」を学びの態度として括って説明しているが、そのような説明は、田中忠夫校長、星野通学長の説明にはないものである。森本学長の独自の解釈を反映させたものであろう。
- ④「実用」の意味について、「すぐ役に立つ技術を学ぶという実用主義的な側面を指しているのではありません」と断定しているが、果たしてそうだろうか。というのは、高商発足時には、商業家育成のため、実際に役に立つ学問も教授し、松山商大・松山大学時代も同様である。また、森本学長は2007年1月の就任挨拶では、語学教育や資格取得など実用重視の教学方針を示しており、齟齬がみられる。「実用」にはそもそも「実用主義」の意味がある。

4月3日、2011年度の入学式が、午前10時よりひめぎんホールで開かれた。経済学部426名、経営学部407名、人文学部英語107名、社会126名、法229名、薬学部74名、大学院経済学研究科修士課程4名、博士課程1名、経営学研究科修士課程6名、言語コミュニケーション研究科修士課程1名、社会学研究科博士課程2名が入学した（学部は編入生含む）。薬学部は定員の半分以下、大幅な定員割れであった<sup>5)</sup>。

森本学長は式辞において、本学の歴史と伝統や創立三恩人の高い志、卒業生の活躍、部活動の輝かしい成績、校訓「三実」について紹介し、「勉学や課外活動に励み、…日本経済復活のために貢献できる有為な人材になってください」と挨拶した。その式辞は、次の通りである。

---

5) 『学内報』第413号、2011年5月。同第414号、2011年6月。



「待ちわびた花咲く春の季節を迎え、希望に満ちた新入生の皆さんを新たに迎え入れる今日のよき日に、多数のご来賓ならびに保護者の皆様のご臨席を賜り、平成二十三年度松山大学大学院・松山大学入学宣誓式をかくも盛大に挙げていきますことは、本学の光栄とするところであり、教職員を代表して、ご出席の皆様に謹んで御礼申し上げます。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんの入学に対して心から歓迎の意を表します。保護者の皆様におかれましては、本日ご入学を迎えられ、感慨無量でさぞかしご安堵なされているものと拝察し、心からお慶び申し上げます。

さて、新入生の皆さん、本学に入学のうへは、本学の学生として自信と誇りをもって勉学や課外活動などに励んでいただきたいと願い、最初に松山大学の歴史と、教学理念である校訓『三実』の精神をお話しておきたいと思えます。

松山大学は大正十二年〔一九二三年〕に開校した旧学制による松山高等商業学校がその始まりです。本校は、松山市出身で、日本初の工業用革ベルトの開発を遂げて製革業において成功し、大阪産業界の雄となり、世間からは「東洋の製革王」と呼ばれ、また、NHK スペシャルドラマで注目されている司馬遼太郎著「坂の上の雲」に登場する秋山好古と親交のあった新田長次郎〔雅号温山〕と、当時の松山市長であり、俳人正岡子規の叔父に当たる加藤恒忠〔雅号拓川〕、そして、山口高等中学校長、大阪高等商業学校長、北予中学〔現愛媛県立松山北高等学校〕校長になられた教育家の加藤彰廉らの協力によって設立されました。長次郎翁は、高等商業学校設立の提案に賛同し、学校の運営には自らは関わらないことを条件に、設立資金として巨額の私財を投じて、私立では全国で三番目の松山高等商業学校を創設しました。また、本校以外にも明治四十四年〔一九一一年〕大阪市浪速区栄町に経済的に恵まれない子弟の教育のため有憐〔隣〕尋常小学校を設立し、学校運営経費ばかりか生徒の学用品や衣服等まで支給し

ながら約十年間経営した後、大阪市に寄贈されました。このように温山翁は製革業やその関連事業の成功を自分だけのものにするのではなく、教育や文化の発展のために還元され、広く社会のために貢献されたのです。現在、文京町キャンパス内に、感謝の意を込めて、三恩人としてそれぞれの胸像を設置しています。

昭和十九年に松山経済専門学校と改称し、第二次世界大戦後の学制改革により、昭和二十四年に商経学部〔現、経済学部、経営学部〕を開設して松山商科大学となり、その後、大学院経済学研究科、人文学部、大学院経営学研究科、法学部を順次開設して文系総合大学となり、平成元年〔一九八九年〕に校名を変更して松山大学となりました。平成十八年〔二〇〇六年〕には、五番目の学部である理系の薬学部と三番目の大学院である大学院社会学研究科を開設して、本学は名実共に総合大学となりました。さらに平成十九年には、四番目の大学院である大学院言語コミュニケーション研究科を開設して、教育研究体制をさらに充実しています。本年、薬学部は完成年度を迎え、いよいよ来春には最初の卒業生を社会に送り出すこととなります。

松山大学の教学理念は、初代校長加藤彰廉が創唱し、第三代校長田中忠夫によってその意義が確立された『真実』『実用』『忠実』の三つの実を持った校訓『三実』の精神です。『真実』とは、「真理に対するまことである。皮相な現象に惑溺しないで進んでその奥に真理を探り、枯死した既成知識に安住しないでたゆまず自ら真知を求める態度。」、また『実用』とは、「用に対するまことである。真理を真理のままに終わらせないで、必ずこれを生活の中に生かし社会に奉仕する積極進取の実践的態度。」、そして『忠実』とは、「人に対するまことである。人のために凶っては己を虚うし、人と交わりを結んでは終生操を変えず自分の言行に対してはどこまでも責任をとらんとする態度である。」とそれぞれ説明されています。

この校訓『三実』の精神は次のように解釈できます。『真実』および

『実用』によって知育における指針を示して、教育研究においては真理を探究することはもちろんのこと、その真理を日々の生活や仕事の中に応用できるものにするのが重要であることを説いています。すなわち、教育研究活動は実学思考〔志向〕で行なわれるべきであると考えられています。

そして、『忠実』によって徳育（道德教育）における指針を示して、人に対しては誠実でなければならないこと、自分の言動については責任を持つことが大切であることを説いて、対人関係のあり方ないし社会の一員としてとるべき態度を説いています。すなわち、信頼関係を重視した教育の必要性を説いています。

本年は、創立八十九年目になりますが、この間に社会に送り出した卒業生は約六万五千人を超え、経済界を中心に全国的に活躍し、高い評価を得てきました。これも卒業生の皆さんが校訓『三実』の精神を大切にしてお過ごし活躍した結果であり、これが松山大学の伝統になってきたと確信しています。皆さんも先輩に続いて大いに活躍できる人材となれるよう勉学に課外活動に励んでください。

次に、皆さんに悔いのない学生時代を過していただくために、いくつかアドバイスしておきたいと思います。

皆さんは夢や希望を持って入学されたことと思いますが、夢や希望を達成するためには、在学中に何について勉学すべきか考えてください。それが分かれば、大学での勉学に対する「やる気」が高まり、勉学が大変楽しくなるでしょう。夢実現のために学生時代に達成すべき目標を立てて、それを達成すべくプラン・ドゥー・チェック・アクションのマネジメントサイクルで自己管理してください。決して諦めることなく、「意志あるところ道あり」の精神で、忍耐強く努力してください。本日の入学式を契機にして、将来に向けて夢を持ち、夢実現のために勉学や課外活動などにおいても高い目標を掲げて、目標達成のために頑張ってください。

しかし、入学に際して大学生活における目標や目的をまだ設定できてい

ない場合もあるでしょう。また、目標や目的を設定できたとしてもそれを達成するためにどのようにすべきか分からない人もいるでしょう。そのような時には、まずは指導教授の先生やカウンセラーの先生に相談してください。指導教授のアドバイスを受けながら自ら考え、自ら解決する自己管理能力を身に付けてください。また、どのような相談についてはどの部署に行けばよいのか判断できない場合には、「学生支援準備室」へ気楽に相談してください。このようにして、一日でも早く皆さんの学生生活が軌道に乗るよう支援いたします。

皆さんは幸いにも社会人になるための準備期間を得ることができました。社会人として活躍できるようになるためには、「人間力」ないし「生きる力」を育む必要があります。そのためには正課としての授業を受けるばかりでなく、課外活動にも積極的に参加する必要があります。是非、課外活動にも参加して社会性を身に付けたり、実社会で活躍するために必要となる気力・体力も養ってください。そのために本学では、従来から勉学ばかりでなく課外活動にも注力して文武両面で成果を挙げ、その結果、課外活動も活発な大学として評価されてきました。前年度では、国家公務員一種採用二次試験で二名が合格、司法試験でも過年度卒業生が合格しました。また、サークル活動ではスノーボードで世界的な活躍が見られましたし、創部三年目で女子駅伝部が全日本大学女子駅伝対校選手権大会で四位に入賞し、シード権を獲得しました。このように課外活動も非常に活性化し、今や「日本一」、「世界一」を目指すまでになりました。皆さんの中からも難関試験の合格者が出ること、全国大会や世界大会で活躍できる選手が現れることを期待しております。

リーマンショック以降厳しい経済状態が続き、回復の兆しが見えた矢先に東日本大震災に見舞われてしまいました。未曾有の大震災による混乱の中にもかかわらず、皆さんはこのようにして勉学に励むことができる機会が与えられたのですから、この幸運に感謝し、また、皆さんを支えていた

だいているご家族の方々への感謝の気持ちを忘れずに勉学や課外活動に励んでください。

最後になりましたが、将来、松山大学で勉学やサークル活動に励むことができて良かったと喜びを感じながら卒業でき、仕事やボランティア活動を通じて、日本経済復活のために貢献できる有為な人材になれますよう祈念して、式辞といたします。

平成二十三年四月三日

松山大学

学長 森本三義 ]<sup>6)</sup>

本年の式辞は、前年とほぼ同様であったが、校訓「三実」の順序について、「真実・忠実・実用」を「真実・実用・忠実」の順序に変更して説明した。また、その解説について、「知育」「德育」という古風な表現を使用して説明した。

本年度は、薬学部完成年度（6年目）に当たり、苦戦中の薬学部について、大きな動きがあった。

4月7日、教学会議が開かれ、森本学長より来年度からの薬学部の定員変更の提案がなされた。定員変更に伴う薬学部の再建については口頭で述べられ、議論された。

4月14日、教学会議が開かれ、森本学長より薬学部再建案の方向性が示され、議論された。

4月19日、森本理事長・学長より、「薬学部入学定員の変更（学則変更）について」の文書が配布された。その大要は次の通りである。

「薬学部の完成年度を迎えたものの、残念ながら定員の引き下げを行わなければならない状態に至ったことに対し、お詫び申し上げる。

---

6) 松山大学総務課所蔵。

薬学部設置の際の、完成後の独立採算制の採用が困難となった。

新たな薬学部運営方針は次の通りである。

- ①薬学部の帰属収入の範囲内で、薬学部のランニングコスト（人件費、教育研究費、管理費）を賄う。
- ②講師以上の教員は28名プラス3名（新特任）とする。13講座からなる小講座制（教授、准教授、助教、助手の4名）は維持できないので、中講座、ないし大講座制に移行する。助教、助手を削減する。
- ③人員の削減は自然減や契約期間の満了をもって対処する。

定員変更の内容は、2012年（平成24）度より定員を現在の160名から100名に、収容定員を960名から600名に変更する。

提案理由は、①これまでの入学者数の推移をみれば、定員確保は望めないし、また収支バランスのとれる130名も無理で、現状を踏まえて100名に引き下げる。②大幅な定員割れは入学生募集活動にとってマイナスである。③補助金確保のためにも定員を引き下げて定員を充足する必要がある。④3回目の第三者評価を受ける際に、薬学部が定員を充足していないと適格認定を受けられないかもしれない。⑤6月に入試説明会があるので、それまでに文部省に申請したい。⑥定員を80名にすることも考えられるが、大学設置基準上、100名を80名に引き下げても、最低の専任教員は28名で変わらないので、100名とする。

今後の志願者・入学者増加策は、国家試験合格率の向上、就職率の向上、指定校推薦の指定校の見直し、特定の私立校との提携、附属薬局の設置、女子寮の設置等をはかる」

そして、資料として、薬学部の入試動向が示された。それは次の如くであった。

	定員	受験者	合格者	追加合格者	不合格者	入学者
2006年度	160名	553名	407名	38名	146名	159名
07	160名	415名	392名	0名	23名	134名
08	160名	313名	252名	0名	61名	113名
09	160名	240名	185名	0名	55名	90名
10	160名	291名	210名	0名	81名	83名
11	160名	278名	187名	0名	91名	72名

この提案について、コメントしよう。

- ①薬学の受験者・入学者の実態を見れば、理事会の提案は遅すぎよう。少なくとも113名しか確保できなかった2008年度から検討すべきであった。
- ②2012年度から160名を100名に削減するとの提案であるが、直近の3年間の実態を見るとそれも甘すぎよう。
- ③再建の方向性についてもどれだけ実効性があるか不明である。附属薬局、女子寮設置に至っては、さらなるコスト増の異常な提案でしかないだろう。
- ④最大の問題点は、理事会の責任・辞任について一切触れていないことである。薬学部提案の最大の責任者の1人が森本学長・理事長であったためであろう。
- ⑤資料につき、2007年度入試において、センター利用で43名の追加、一般入試で22名の追加合格を出しているが、記されていない。

4月21日、各学部で教授会が開催され、薬学部の定員削減提・再建案が意見聴取され、議論された。

経済学部教授会では、理事会提示の薬学部定員削減案は定員を160名とすることにより設立資金回収をも含めた学部独立採算制で薬学部を運営するという合同教授会（当時）における約束の変更であると、批判し、定員削減の学則変更をするならば理事会が以下のことを約束することを求めるとして、次のよう

な決議をした。

- I. 理事会の新提案 100 名における薬学部再建プランは、①合同教授会で約束した設立資金回収を含む独立採算制を維持する、②設立資金の回収は放棄するが、建物、機器備品の更新（5 億円）を含むキャッシュフロー均衡を行う、③人件費コストのみを賄うランニングコストをはかる、3 通りのうちの③であり、文系学部への負担を最初から求めるもので、受け入れられない。最低でも②でなければならない。そして、薬学部自身が経費削減により 5 億円を捻出し、理事会がそれを断行すべきである。その誓約書を 10 月末までに提示することを求める。
- II. 入学者 100 名について、これまでの入学者数の推移を見れば、100 名の実現も危ぶまれる。したがって、100 名を確保する具体的なプランの提示を求める。

また、同日の法学部教授会でも、理事会の経営責任、理事長の辞職、薬学部独立採算制の工程表、等の意見が出た。

4 月 28 日、14 時 30 分より教学会議が開催された。薬学部定員変更（学則改正）について、審議された。

5 月 1 日発行の『学内報』第 412 号（2011 年 5 月）に「2011 年度 事業計画及び予算の概要」が掲載された。その「理念・目的」の箇所では、4 月の『学内報』と同じく、校訓「三実」の順序について、それまでの「真実・忠実・実用」から、「真実・実用・忠実」に変更されていた。ここでも変更理由については、説明がされていなかった。また、薬学部については、大学院を設置することを検討中であり、薬学部の定員を現在の 160 名から 100 名に削減するとの表明をしていた。そして、2011 年度の主な事業計画として、中・長期経営計画検討委員会の編成、学内情報ネットワーク・インフラの再構築、創立 90 周年事業実施準備、薬剤師国家試験合格に向けての体制強化等が打ち出されていた<sup>7)</sup>



5月9日、経済学部長中嶋慎治、法学部長妹尾克敏、経済教学委員吉田健三、経営教学委員池上真人、人文教学委員長野武、法学部教学委員遠藤泰弘、学生委員長松本直樹、経済研究科長入江重吉、言語コミュニケーション研究科長岡山勇一、社会学研究科長小松洋、短大学長清野良栄の11人による教学会議の開催要求が出された。なお、経営学部長平田桂一、人文学部長奥村義博は名を連ねていない。議題は、①薬学部の運営はキャッシュフローベースでの収支均衡を目標とする、②薬学部の定員は80名とする、③薬学部再建案を2011年10月末までに教学会議で決め、2012年度4月までに実施する。④3年後に検証する、⑤履行できなかった場合、理事長および理事会が経営責任をとることを求める、というものであった。

5月9日、19時より教学会議が開催された。議題は「薬学部定員変更（学則改正）について」であった。

森本理事長・学長より、薬学部入学定員の変更（学則改正）について、薬学部の本年1年生が定員の50%を切り、減少傾向をとめることができていないので、再建のために思い切った改革を行なう、として、次のような提案をした。

- ①キャッシュフローベースでの収支均衡を目指し、当面の入学者は80名とし、収支改善の為に入学者100名をめざす。
- ②薬学部教員数は助教を含め28名プラス $\alpha$ 、最大限31名とする。現在講師以上34名、助教13名、助手14名で構成されているが、人員削減は自然減および契約期間満了でもって対処する。
- ③次年度から現在の小講座制から大講座制に移行する。
- ④薬学部再建案は、10月末までの教学会議で承認を受け、2012年4月までに再建案を確実に実施する。

---

7) 『学内報』第413号、2011年5月。

そして、定員変更の内容として、入学定員を現在の160名から100名に、収容定員を960名から600名とする、というものであった。また、薬学部財務収支シミュレーションも示された。

5月12日、本年度の第1回全学教授会が開催された。議題は「薬学部定員の変更（学則改正）について」であった。

森本理事長・学長は、大要次のように述べた。薬学部が完成年度を迎えたにもかかわらず、残念ながら定員の削減をしなければならなくなったことに責任を痛感している、お詫びしたい。しかし、将来松山大学の発展のためには是が否でも薬学部を育成しなければならない、本年1年生の入学者が50%を切り、減少傾向をとめることができていないが、この減少傾向にピリオドを打ち、薬学部再建のために思い切った改革を行わなければならないと述べ、先の教学会議で示した4項目の改革案を提案した。そして、この4項目を実現できなかった場合には、理事長、副学長、常務理事は辞任すると表明した。

定員変更の内容は、2012年度から薬学部の定員を160名から100名に引き下げることであった。

激論がなされ、投票の結果、賛成60、反対46、白票10で、僅差（4票）であるが、定員削減が可決された。

また、同日の全学教授会で、「2011（平成23）年度 事業計画書」が報告されている。

5月31日、葛谷昌之薬学部長が辞任し、新たに加茂直樹教授（1946年生まれ、大阪大学大学院理学研究科博士課程、65歳、生物、物理化学）が就任した。また、葛谷氏は寄附行為の規程により理事、評議員も退任し、加茂氏が代わった<sup>8)</sup>。薬学部の定員割れ状態への引責辞任であったが、理事会は責任をとっていない。

6月1日、2012年度の入試説明会が行なわれ、入試制度別募集人員及び日

---

8) 『学内報』第415号、2011年7月。

程が発表された。前年との変更点は、経済が一般入試Ⅰ期を20名→30名に、センター試験利用入試の後期15名→20名に増やし、一般公募(エクセレント)を20名→15名に、アドミッション入試を15名→5名に減らしたことで、他の文系、経営・人英・人社・法も前年と変わらなかった。

最大の変化は薬学部であった。定員をこれまでの160名から100名とし、入試制度別募集人員も、次の如く変更した<sup>9)</sup>

#### 2012年度薬学部の入試制度別募集人員

		2011年度		2012年度
一般入試	Ⅰ期	50名	→	40名
	Ⅱ期	15名	→	10名
センター利用入試	前期	30名	→	10名
	スカラ	10名	→	5名
	後期	5名	→	5名
指定校		30名	→	15名
一般公募		20名	→	15名
計		160名	→	100名

6月30日、第2回全学教授会が開かれた。報告事項として「2010年度決算および事業報告について」が報告された。

7月1日発行の『学内報』第415号、2011年7月に「2010年度 決算について」が掲載されている。そこで、資金運用面で、時価が貸借対照表計上額を超えないものとして、地方債・社債・株式で6,574万1,421円、仕組債で5億7,479万円、合計6億4,023万6,221円の時価損失を出していた。デリバティブ取引では1件あり(6.4億円)2億7,668万円の時価損失を出している<sup>10)</sup>そ

9) 『学内報』第414号、2011年6月。

10) 『学内報』第415号、2011年7月。

して、デリバティブ運用損として2億2,500万円を出している。ただし、「デリバティブ運用損の計上は文部科学省より平成23年〔2011年〕2月17日付け通知により適用を指示されたもので、当期は、スワップ契約の更改実施に伴い、同時に雑収入としてデリバティブ運用益を2億2,500万円計上しており、実損ではない」としている。

7月15日、評議員の補欠選挙があり、経済学部の鈴木茂が新評議員に就任している。

8月23日、常務理事会において、「薬学部総括について」が議題とされた。

8月29日、常務理事会より「薬学部総括（案）」が提出された。目次と大要は次の通りである。

## 「1 はじめに

ここに薬学部完成年度を迎えながらも、その再建計画の成否が問われている等の実情を踏まえ、薬学部総括を纏める。

新学部としての薬学部の選択は、商科大学を前身に持つ本学園にとっては大胆な決断であった。これまで、経済学部、経営学部、人文学部、法学部と成長してきた松山大学にとって、なじみのある文系学部とは異質な理系学部への思い切った展開を行ったといえる。

創立1923年以來の本学の伝統ある土壌において薬学部を育て、文理融合という抽象的な言葉で表現される理想的な理念が本学園にしっかり根付くのは生半なことではない。

森本三義理事長の提案により「平成23年10月末までに薬学部再建案並びに総括等を教学会議に提出し了承をえる必要がある。」旨の説明が行われ、薬学部の総括について、なぜ現状に至ったのかを「設置趣旨、理由」「施設、設備関係」「薬学部内」について、それぞれ、平田桂一、猪野道夫、加茂直樹、墨岡学が分担し、分析し纏めた。

## 2 新学部「薬学部」設置の手續について

2004年8月30日の学部長会における報告事項に始まり、11月4日開催の合同教授会で承認された。

## 3 薬学部設置にあたって考慮したこと

- 理工系学部を設置することにより総合大学となることや文理融合を目指す
- 隣の、愛媛大学にない学部であること
- 全国的、中四国で薬学部は余りない学部であること
- 文系と違い資格取得できること
- 総合大学化で他学部の受験生も増加できること
- 競争率が医学部について高いこと
- 全国から受験生をあつめることができること、例えば、宮崎県の九州保健大学では2003年度全国から2,000名、千葉科学大学では2004年度4,600名が受験した

## 4 薬学部設置の趣旨および必要性

- 高齢化社会、医療、福祉へのニーズの高まり
- 薬剤師需要、薬学の役割大きい
- 愛媛県に薬学部はなく、近県の高知、鹿児島、大分、佐賀、山口、鳥取、島根なども薬学部空白地帯となっている
- 地方、とくに愛媛県は薬剤師が不足している

## 5 学生確保の見通しについて

- 愛媛県では、県内に薬学部がないため、毎年100名を超える学生が県外に出ている。高知でも毎年40余名、山口でも毎年40名弱、大分でも毎年40余名が県外に出ている。この4県で毎年200名が県外に出ている。従って、学生確保は問題ない
- 県内の薬学部志望者は県外にでると経済的負担は高い。だから、本県に薬学部ができれば、愛媛県ばかりでなく、高知、香川、徳島、大分、

山口，鳥取，島根等から集まってくると確信する

- 薬学部は全国的にまだ少なく，志願倍率も 2003 年度 17.4 倍と高く，医学部について高い
- 6 薬学部設立時において，中国・四国・九州地区で薬学部がなかった県  
山口，高知，鳥取，島根，愛媛，高知，大分，鹿児島，佐賀
- 7 2004 年 2005 年（4 年制）中国・四国・九州地区の薬学部，（ ）内の数字は入学定員  
略

8 2006（平成 18）年度の薬学部入試結果について

8.1 薬学部の 2006（平成 18）年度の入試結果

	前期	後期	合計
志願者	502 名	97 名	599 名
受験者	468 名	85 名	533 名
合格者	345 名	62 名	407 名
競争率	1.36	1.37	

9 志願者が集まらなかった理由

9.1 6 年制薬学部

- 志願者減は 6 年制薬学部の共通の現象である

9.2 経済状況

- 景気回復が依然と期待できなく，経済的負担で受験生が敬遠した

9.3 医療・看護系への志望変更

- 薬学部 6 年制移行に伴い，受験生が医療，看護系に志望変更した

9.4 将来の就職への不安

- 将来薬剤師過剰となり，就職への不安，等

9.5 2006 年度入試募集活動のおくれ

- 9.6 開設前の情報公表の控え
- 9.7 高校、予備校とのパイプづくりのおくれ
- 9.8 国家試験合格率の実績がないこと
- 9.9 マスメディアの反応など
  - 地元新聞によるマイナスイメージ記事
- 10 2006（平成18）年度山口・九州・沖縄地区、中国四国地区の薬学部入学者動向
  - 2006年度入試において、山口・九州・沖縄地区、中国四国地区から全国の薬学部入学者数は2,483名いた。これらの地区を開拓すれば、本学薬学部への受験生、入学者をつかみとることが可能である
- 11 高校・予備校訪問を通して緊密な関係略
- 12 薬学部設置資金について
  - 設置資金は、53億6,826万3,000円。内訳は、9号館、機器備品、図書費、薬用植物園。計画当初は、33億3,060万円であった
  - 9号館は当初8階建の予定であったが、研究室のスペースを70平方メートルから140平方メートルに拡大したことにより10階建となった
  - 動物実験施設を追加した
  - 地下室に廃水、廃液処理施設、薬品庫施設等を設置
  - 1階に共通機器室設置等
  - 機器備品について、学部の特徴を出すために、当初より10%上乗せした
  - 図書費は9,000万円
  - 薬用植物園は5,000万円
- 13 薬学部帰属収入及び学納金収入と経常経費（人件費、教育研究費、管理経費）について

- 人件費比率は高いが、教育研究費は文系と変わらない、管理経費は下回っている

14 施設，設備等の整備について  
略

15 薬学部入試広報の実施状況

15. 1 （高校訪問）～10（病院実習施設の訪問）  
略

15. 11 上記のような広報活動および入試制度の検討に関わらず，特に愛媛県入学者が減り続けた推定原因

- 西日本に薬学部が創設されたこと
- 初年度追加合格をだし，学力の低い学生を入学させたこと
- 若干の高校教員が，文系志望の学生を薬学部に入学者に入学させたことに反感をもっていること
- 共通教育科目に未開講科目が多いというマスコミの負の報道

15. 12 今後入学者増加に向けて

入学者増加のために薬学部として次のように考えている。

1. 学力の高い，意欲ある学生を入学させる方策の検討
2. 低学力者を入学させない
3. 効果的な宣伝
4. 入学前教育を行う
5. カリキュラムの改革…化学の重視，進級条件を厳しくする
6. 評価の高い就職結果を出す
7. 問題ある学生への個別指導…場合によっては別の進路指導
8. 薬剤師国家試験…高い合格率を目指す
9. 県職員の薬剤師合格者9名中，5名が本学薬学部出身者であった



## 16 薬剤師国家試験対策について

4年次 CBT 対策, 6年次総合薬学演習を行う。6年次冬に総合薬学演習の試験を行ない, 不合格の場合卒業させない。国家試験も受けさせない。

## 17 松山大学薬学部の薬剤師国家試験対策等対策ソフト

略

## 18 まとめ

今日の, 医薬品の多様な作用と副作用を正しく認識できる専門性の高い薬剤師を育成する。医師や看護師と対等に医療チームのメンバーとして活躍できる薬剤師を育成する。臨床現場のニーズに基づく問題解決能力を持つ薬剤師を育成する。このような薬剤師育成を本学で行うためには, 総括で取りあげた事柄を解決するための方策をたてなければならない。

そのためにこれから実施しなければならないことは, 入学者確保のための薬学部入試広報の対策からはじまり, 薬剤師国家試験対策, CBT 対策まで入学から卒業までいくつもの段階があるが, まず, 具体的な入学者確保の方策および国家試験対策を練らなければならない。

これによって設置計画にあったような地域医療に貢献する卒業生を輩出し, 本学薬学部の知名度を上げることができる。

- 設置計画のなかにある誤算。4年制薬学部をもとにした設置前の調査・予測であったにしても, 志願者数は予測を下回り, 設備投資は当初の予定を上回った。入学試験の結果に出ているように, 設置時の160名の定員は, 6年制への移行, 経済状況の悪化など外的要因を考慮するともう少し絞るべきであったと判断される。設備投資は薬剤師育成のみに絞ったミニマムなものから基礎薬学など研究面にも十分な配慮をすることになったため50億円を上回った
- 出遅れた薬学部設置。募集開始後, 県内高校などの関係者から本学の

薬学部設置のタイミングが遅かったことなどが批判された。この影響が志願者数に現れたと判断される

- 入学前教育。入学前教育の実施とその広報が遅れていた
- 入試広報対策
- 高校からの見学。2006年度3校しかなく、2007年度1校しかなかった。県外も2008年度1校しかなかった
- 高大連携。一部だが、2009年から実施
- カリキュラムの整備。1年次教育の見直し、実習の見直し
- 薬剤師国家試験対策
- 大学院の設置検討
- 人件費、教育研究費、管理経費比率。人件費比率が高い
- 地域連携

大学の予測が甘かったと批判されるべき面もあるが、…本学にとって理系も含めた総合大学への道を選択したのであって、ここでの過去への批判はここまでにとどめたい。」

この「薬学部総括（案）」について、コメントしよう。

- ①まず、表題であるが、「薬学部総括（案）」だけでなく、「薬学部総括および薬学部再建（案）」とすべきであろう。
- ②この文書は、全体的にみて極めて不十分、事実の羅列、弁明であり、十分な総括になっていない。
- ③薬学部総括について、いつから、どのようなメンバーで、いつ会議を開いたのか、経過説明がない。総括委員は不明だが、「はじめに」の文章によると、平田桂一、猪野道夫、加茂直樹、墨岡学の4人が分担執筆しているので、おそらく、この4人が実質上の総括委員であろう。しかし、平田桂一は現経営学部長、猪野道夫は2010年3月31日に退職した再雇用の人、加茂直樹は最近薬学部長になったばかりの人である。薬学部の総括と再建策が最大の課題

なのだから、現在の理事長・学長が責任者となり、常務理事と副学長全員入り、総括の委員となるべきだろう。全学教授会でも学長・理事長が述べたように、薬学部再建案を策定し、実施できなければ、理事長・副学長・常務理事が退陣すると言明したのだから、墨岡学副学長兼常務理事の他に森本理事長、安田副学長、西原友昭、岡村伸生、松浦一悦の各常務理事が全員入って集団で総括すべきであった。また、6年近く薬学部長を務めた葛谷氏が入っていないのも問題である。さらに、総括するなら、薬学部設置に批判的であった人達を委員にしないと、真の総括にならない。また、当事者の薬学部教授会自身が総括し、案を出し、再建の方向性を審議したのか不明である。とにかく、委員構成と経過が不明であり、総括案も、再建案も、纏めも主としてこの4人に任せたように思われる。

④総括案の各項目について見てみよう。

○平田氏が分担した「設置趣旨、理由」について。

ア、多くは、認可申請時の文書の要約であり、弁明の書となっている。

イ、入試結果については2006年度だけであり、それ以後の分析がなく、不十分である。

ウ、志願者予測が外れたことに対し、6年制薬学部共通の現象、不景気による6年制薬学部への経済的負担、薬剤師供給過剰時代の到来による就職への不安、などを上げているが、それらは全国共通の一般的要因だろう。

エ、本学固有の問題として、文部省の指導のため、募集活動がおくれ、また、推薦入試、センター入試も導入できなかった、開設前の情報公開がおくれ、本当に薬学部ができるのかの不安を受験生に与えた、認可が下りた時点での宣伝をする機会を持たなかった、国家試験の実績がない、未開講科目が多いなどマスコミによる負のイメージなどを上げているが、それらは、2006年度・初年次のことであり、2007年度以降の入試には当てはまらない。2007年度以降の入試の分析をしていないので、

十分な総括になっていない。

○猪野氏が分担した「設備，設置資金関係」について。

- ・数字の羅列で，設置資金が33億3,060万円から53億6,826万3,000円に異常に増大したことに対し，財務担当の常務理事として何の反省もなく，責任感も見られない。

○加茂氏が分担した「薬学部内」について。

ア，2006年から2011年にかけて，高校訪問の高校名，高校の薬学部訪問の名前，出張講義・模擬講義，ガイダンス等高校名，公開講座，講演会，病院訪問，等を上げているだけ。事実の羅列で，文章もほとんどなく，総括になっていない。

イ，広報，入試制度の検討に関わらず愛媛県出身者の入学者が減り続けた理由について「原因はよくわからない」と述べ，唯一「推定」しているのが，初年度の追加合格で，「学力の低い学生を入学させたこと」をあげていることである。その通りであるが，分析不足である。

ウ，今後の入学者増加策について，これが文系にとっては一番重要で，聞きたい処である。対策として，9項目あげているが，文章も短く，羅列的・常識的である。その実効性が文系に伝わらない。

○まとめの箇所は墨岡氏が分担したと思われるが，反省点や再建方針が述べられているが，短かすぎて，十分な説明がない。また，「過去への批判はここまでにとめたい」と批判を封ずる一文があるが，それでは，失敗した薬学部問題を真に総括することにならないだろう。

⑤薬学部設置は失敗であった。本学に多大な財政負担と損失をもたらした，壮大な失敗であった。薬学部の総括は，設置段階に遡ってすべきである。失敗の原因は，どこにあるだろうか？

ア，学内で十分な検討を行なうことなく，学部長に相談することなく，理事会主導で拙速で決めたこと。

イ，改革に焦り，文系じり貧論を唱えた誤り。

ウ、文理融合といった言葉の遊戯。

エ、薬学部神話。薬学部は競争率が高いと過大に宣伝したこと。調査では本学に受験生が大量に来ることにはなっていないにもかかわらず、立ち止まらず、強行したこと。

オ、紀伊国屋の案に安易に乗った自主性のなさ。そして、紀伊国屋は定員150名であったが、さらに、経営の視点から10名上乘せし160名を増やしたこと。そもそも160人は多すぎた。過去人文設置の場合、英語英米学科50名、社会学科50名で出発した。小さく生んで、情勢を見ながら増やす堅実な方針をとった。

カ、薬学部は本学に根がないものだから、学部長予定者・葛谷氏の言いなりになる無責任さ、設置費用が33億円→53億円に異常に増え、教員人事も助教を予定していなかったにも関わらず採用し、教員数も増大した。それらの変更を教授会にも諮らずに行なったこと。

キ、設置を強行するために、設置資金は薬学部完成後文系に返すと、約束した。薬学部は独立採算制を取り、文系に迷惑をかけないと約束したが、それを反故にしたこと。そして、失敗したのにその経営責任をとらない無責任さ。

ク、学費の高さ。地方で不景気が続いているのに、1学年200万円は高すぎたこと。

⑥そして、薬学部開設後、初年度から連続して定員を割っているのだから、完成年度を待つことなく、すぐに検討すべきであったが、行なわなかった。今日まで、ズルズル引きのばし、先送りしてきた。森本理事長ら常務理事の無責任さ。

⑦薬学部再建策について。再建策の実施主体は、薬学部である。9項目を提案している薬学部で徹底した議論と実行が求められるが、その熱意が文系に十分伝わって来ない。薬学部教員の発言がほとんどないのである。

9月1日、教学会議が開かれ、「薬学部再建案について」が審議された。激論が交わされたようである。

9月24日、2012年度経済・経営のAO入試が行なわれた。結果は後述。

9月28日、教学会議が開かれ、「薬学部再建案」が提案され、審議された。激論が交わされたようである。

10月2日、2012年度の大学院第Ⅰ期入試（修士課程）、学内進学者特別選抜入試（経済学研究科、社会学研究科）が行なわれた。経済学研究科修士課程は学内選抜1名が受験し、1名が合格した。経営学研究科修士課程は学内選抜1名が受験し、1名が合格した。言語コミュニケーション研究科修士課程はいなかった。一般選抜のⅠ期入試は、経済・経営・言語共に受験生はなく、社会学修士課程は2名が受験して、1名が合格した<sup>11)</sup>

10月12日、経済学部は中国北京の對外経済貿易大学国際経済研究院と学術交流協定を調印した<sup>12)</sup>

10月17日、教学会議が開催され、「薬学部再建案について」審議された。

10月20日、教学会議が開催され、「薬学部再建案について」審議された。

10月23日、仙台での第29回全日本女子駅伝対校選手権大会で、5位入賞をはたし、2年連続シード権を獲得した<sup>13)</sup>

10月24日、教学会議が開催され、「薬学部再建案について」審議された。

10月31日、教学会議が開催され、「薬学部再建案について」審議された。10月末までに薬学部再建案を決定することになっていたのので、この時の教学会議で承認された。

11月12、13日の両日、2012年度の推薦・特別選抜入試が行なわれた。12日が経済・経営、13日が人文・法・薬学部であった。募集人員は、法の特別選抜を除いて（25名→20名）、前年と同じ、結果は次の通りであった<sup>14)</sup> 薬学

11) 『学内報』第420号、2011年12月。

12) 同。

13) 同。

14) 『学内報』第421号、2012年1月。

部は指定校も集まらず、一般公募は全入で、大変厳しかった。

表1 2012年度推薦・特別選抜入試

	募集人員	志願者	合格者
経済学部 (指定校制)	105名	133名	132名
(一般公募)	20名	82名	51名
(アドミッションズ・オフィス)	5名	15名	7名
(各種活動)	12名	8名	8名
(資格取得者)	若干名	1名	1名
経営学部 (指定校制)	50名	53名	53名
(一般公募)	32名	136名	67名
(アドミッションズ・オフィス)	35名	132名	57名
(各種活動)	30名	32名	31名
人文英語 (指定校制)	25名	20名	20名
(資格取得者)	若干名	9名	9名
(総合学科卒業生)	若干名	2名	2名
社会 (指定校制)	15名	25名	24名
(社会人)	若干名	1名	1名
法学部 (指定校制)	20名	17名	17名
(一般公募制)	50名	136名	101名
(各種活動)	10名	5名	5名
(総合学科卒業生)	10名	25名	11名
薬学部 (指定校制)	15名	12名	12名
(一般公募)	15名	15名	12名

11月24日、加茂薬学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、松岡一郎(56歳、神経化学等)が選出された。任期は2012年4月から2年間。

11月29日、妹尾法学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、村田毅之（54歳、労働法）が選出された。任期は2012年4月から2年間。

11月30日、奥村人文学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、奥村義博（60歳、英米文学概論）が再選された<sup>15)</sup> 任期は2012年4月から2年間。

12月8日、平田経営学部長の任期満了に伴う学部長選挙が行なわれ、浅野剛（59歳、経営学概論等）が選出された。任期は、2012年4月から2年間。

12月14日、清野短大学長の任期満了に伴う学長選挙が行なわれ、清野良栄（61歳、現代資本主義論）が再選された<sup>16)</sup> 任期は2012年4月から3年間。

12月15日、第3回全学教授会が開かれた。そこで、報告事項として「薬学部再建案について」が出された。本来は、審議事項とすべきであったが、教学会議で決定された再建案が報告された。資料は回収されて不明だが、具体的な薬学部再建案としては、①100名への定員削減に伴う、薬学部のコスト削減、人件費、研究費削減をすすめる、②入学者確保のために、広報活動、薬学部のための特別スカラシップの導入、薬剤師会との連携強化を行なう、国家試験対策、入学前教育、成績下位者への補習授業を行なう、等々であった。

2012年1月1日発行の『学内報』第421号に、安田俊一副学長が「『校訓三実』と『3つの方針』」という文書を掲載した<sup>17)</sup>。そこで、校訓「三実主義」の順序変更の理由について、次のように述べている。なお、下線部分は川東による。

「まもなく本学HPに『入学者受け入れ方針（アドミッションポリシー：AP）』、『カリキュラムポリシー：CP）』、『学位授与方針（ディプロマポリシー：DP）』（以上、『3つの方針』）、及び本学の校訓についての現代的解

15) 『学内報』第421号、2012年1月。

16) 『学内報』第422号、2012年2月。

17) 安田俊一「『校訓三実』と『3つの方針』」『学内報』421号、2012年1月1日。下線部分は、川東。



積が発表されます。

今日はここに至るまでの経緯、及び『校訓三実』の現代的解釈について報告いたします。なお、松山短期大学では、今回紹介する『校訓三実』については先行して公開されています。

中教審は2005年1月の『我が国の高等教育の将来像』及び2008年12月『学士課程教育の構築に向けて』の2つの答申の中で、アドミッションポリシーの明確化、教育課程の改善、出口管理の強化など、『3つの方針』に貫かれた教学経営を行うことを大学に求めています。

こうした流れを受けて、2010年1月14日開催の教学会議で、本学の『3つの方針』策定のために、まずは全学方針にあたる『校訓三実』について、現代的なまとめを行うこととし、そのための作業グループの設置が決定されました。作業グループの構成は教務委員長、学生委員長、入試委員長、キャリアセンター長、及び対応部署からの事務職員とし、副学長がとりまとめることになりました。

作業部会で12回にわたる検討を行い、大学全体の教育方針ともいえる『校訓三実』についての解説原案を策定、2010年7月22日の教学会議で承認を得ました。その後、各学部・研究科の3つの方針の議論が行われ、最終的に2011年10月末までにすべての学部・研究科、及び全学共通科目についてのカリキュラム編成方針がでそろい、HPで公開する運びとなりました。

大学によっては『大学全体の3つの方針』を定め、それに従って各学部や研究科の方針を定めているようなところもあります。私学においては『建学の精神』を基礎にしてそこから人材育成方針を定めて大学全体の3つの方針を定めているところが多いようです。国公立大学の場合はそうした建学の精神がない場合があり、そうしたところでは別途、『大学それ自体の目的』について定めているようです（例、愛媛大学『大学憲章』）。

本学では大学全体の方針に当たるものとして『校訓三実』がありますの

で、それをよりはっきりと明示することで大学全体の共有方針とすることとし、上記のような過程を経て決定してきました。

以上のように、『校訓三実』の公式解釈を確定したうえで、『松山大学の学位授与方針』を『校訓三実』を踏まえた上で各学部・研究科が定めた課程を修了することとし、大学全体でのアドミッションポリシーとカリキュラムポリシーは定めていません。さて、ここへ至る議論の中でこれまでの『慣習』と異なる表記を採用しています。

これまで慣習的に『真実・忠実・実用』と言い表されてきた『三実』の順序を『真実・実用・忠実』と確定しました。もともと加藤初代校長による『校訓三実』の提唱と田中第三代校長による解説では『真実・実用・忠実』となっており、田中校長はその順序で自然に説明を行っています。そこで元々の形に戻したうえで、各項目に解説を加えました。その際、田中校長の説明に従って<sup>①</sup>『真実』『実用』は学びの態度、『忠実』は人としてのあり方としてまとめました。<sup>②</sup>

以下に、HPで公開する『校訓三実』の部分を掲載します。なお、短期大学のHPで公開されているバージョンは以下の『松山大学』が『松山短期大学』となっているだけで、ほかは同じです。

松山大学の校訓について

松山大学は大正12（1923）年に「松山高等商業学校」として発足し、「松山経済専門学校」（1944年）、「松山商科大学」（1947年）を経て、現在の「松山大学」（1989年）へと発展してきました。<sup>③</sup>

初代校長加藤彰廉は、「校訓」として「真実」・「忠実」・「実用」の3つを定めました。その後、第三代校長田中忠夫が以下のような解釈をまとめ、<sup>④</sup>昭和2（1927）年の生徒要覧に掲載し、全学に周知しました。「校訓三実」はそれ以来松山大学に脈々として受け継がれています。<sup>⑤</sup>

〈校訓三実〉

■真理：真理に対するまことである。皮相な現象に惑溺しないで進んでそ

の奥に真理を探り、枯死した既成知識に安住しないでたゆまず自ら真知を求める態度である。

- 実用：用に対するまことである。真理を真理のままに終わらせないで、必ずこれを生活の中に生かし社会に奉仕する積極進取の実践的態度である」
- 忠実：人に対するまことである。人のために凶っては己を虚しうし、人と交わりを結んでは終生操を変えず自分の言行に対してはどこまでも責任をとらんとする態度である。

(「校訓三実」の意味)

「真実」「実用」は学びの態度、「忠実」は人としてのあり方を示しています。

「真実」とは、既存の「知」に満足することなく、真理を求めるために自ら学び、究め続けようとする態度です。氾濫する情報に惑わされることなく、その中から客観的事実を見出し、真理を見極めることが肝要です。

「実用」とは、単に「すぐ役に立つ技術を学ぶ」という実用主義的な側面を指しているわけではありません。「知」を単に知識として学ぶだけでなく、自らの生活や仕事の中に活かすべく、常に現実的な問題を念頭に置きながら学ぶ態度を示しています。大学での学びで得た知識を日常的な生活の中にも積極的に活かしていくこうした態度は、松山大学における学びの特徴として授業の中にも活かされています。

「忠実」とは、人間関係や社会において、人としてとるべき態度を示しています。人は一人では生きていくことはできません。友人・家族・組織といった、広い意味での社会生活において、他者と誠実に向き合い、嘘偽りのない信頼関係を築くためには倫理的な態度はもとより、積極的に人と交わり、自らを謙虚に、そして互いの意見を尊重し共有しようとする態度が重要です。「忠実」の精神は松山大学のあらゆる人間関係の基本として共有されています。

「校訓三実」は松山大学の学生・教職員が拠り所とすべき教訓ですが、人生を生きていく確かな指針でもあります。学生の皆さんには、大学卒業後も「本学の卒業生」として生涯この態度を持ち続けていただくことを願っています。

(注) 昭和2年の生徒要覧に記載された「三実」の順序については、「松山商科大学六十年史」に「松山商科大学三十年史補遺」として大鳥居名誉教授の文章があり、その中に「『校訓三実』の配列順序については諸説紛々統一を欠き、甚だ見苦しいが、真実、忠実、実用にするのが常識的で理に叶っているように思う。」(p. 195 三実主義について)と述べられています。これは1984年の記述ですので、おそらくはこの文章あたりから「真実・忠実・実用」が慣習的に定着してきたのではないかと思われます。作業部会の議論の中で明らかにされてきました。<sup>⑦</sup>

この安田副学長の文書には、7点にわたって不正確な表現や事実誤認が見られる。それを下線部分で示した。以下、その7点にわたって説明しておこう。

①「これまで慣習的に『真実・忠実・実用』と言い表されてきた『三実』の順序を『真実・実用・忠実』と確定しました。もともと加藤初代校長による『校訓三実』の提唱と田中第三代校長による解説では『真実・実用・忠実』となっており、田中校長はその順序で自然に説明を行っています。そこで元々の形に戻した」と述べているが、加藤彰廉初代校長が1926（大正15）年3月8日の第1回卒業式で述べた校訓「三実」の順序は「実用・忠実・真実」であり、田中忠夫校長が1941（昭和16）年4月10日の始業式で訓示した「三実主義」の順序は「真実・実用・忠実」であり、両者の順序は異なっているので、この箇所は史実誤認である。

- ②「その際、田中校長の説明に従って『真実』『実用』は学びの態度、『忠実』は人としてのあり方としてまとめました」とあるが、田中校長の「三実主義」の説明を読んで見ても、「『真実』『実用』は学びの態度」とはまとめてはおらず、これは、安田副学長の独自の解釈であろう。
- ③「松山商科大学」(1947年)とあるが、松山商科大学は1949年4月発足であり、事実誤認である。
- ④校訓「三実」について、「第三代校長田中忠夫が以下のような解釈をまとめ」たとして、三実主義の各項目の説明を掲げているが、不正確である。この解説文は、田中校長の解説文をもとにして、第2代松山商科大学長の星野通が2～3行程度に短く簡略化・簡明化して、1962年度の『学生要覧』に掲げたものだからである。
- ⑤「昭和2(1927)年の生徒要覧に掲載し」とあるが、田中校長の就任は、昭和9(1934)年10月6日であり、そして、田中校長が校訓「三実主義」の明文化と確定解釈を行ない生徒要覧に掲げたのは昭和16(1941)年度であり、この箇所も事実誤認である。
- ⑥「昭和2年の生徒要覧」とあるが、昭和16年の事実誤認である。
- ⑦「おそらくはこの文章あたりから『真実・忠実・実用』が慣習的に定着してきたのではないかと考えられます。作業部会の議論の中で明らかにされてきました」とあるが、事実誤認である。田中校長は1941年4月に「真実・実用・忠実」の順序で、各項目について明文化したが、1957年4月に第2代松山商科大学学長に就任した星野通学長が順序を「真実・忠実・実用」に変更し、1962年4月に簡明化して説明した。それ以降の学長、すなわち、増岡喜義、八木亀太郎、太田明二、伊藤恒夫らは一貫して、「真実・忠実・実用」の順序で説明してきており、1984年の大鳥居さんの一文からではない。だから、この注は過去の歴代学長の式辞や『学内報』や『学生便覧』を調査、確認せずに、推測した記述であり、歴史的に見て事実誤認である。

以上、この安田文書は、事実誤認に基づく校訓「三実主義」の順序の変更であった。

星野学長が、「真実・忠実・実用」の順序に変更したのは、戦後の日本国憲法、教育基本法、学校教育法をよく理解した上で、あえて、田中校長の順序に代えて、「真実・忠実・実用」に変更したものである<sup>18)</sup>。神森学長も宮崎学長も学校教育法の順序に符号したものと指摘している。事実誤認である以上、校訓「三実主義」の順序は、星野学長時代に制定された「真実・忠実・実用」に戻すべきであろう。

1月12日、第4回全学教授会が開催された。審議事項は「松山各学部教授会規則および松山大学全学教授会規則の改正について」で、前回の継続審議であった。

2012年1月14、15日の両日、大学入試センター試験が行なわれた。

1月23日、2012年度の一般入学試験Ⅰ期日程及び大学入試センター試験利用入試（経営前期A方式＝個別試験併用型）、センター試験利用入試（薬前期A方式）が行なわれた。

1月24日、一般入学試験Ⅰ期日程、センター試験利用入試（薬学部前期A方式）が行なわれた。一般入試のⅠ期日程の募集人員は、文系では経済が20名→30名に増やしたが、他は変更なかった。薬学部は今年度から入学定員を160名→100名に減らし、メインの募集定員を50名→40名に減らした。

Ⅰ期日程の結果は次の通りである。文系の志願者は各学部はともに大きく激減し、前年の2,152名→1,439名へ、713名、33.1%も減少した。合格者は多めに出したので実質競争倍率は激減した（4.52→2.85）。一方、定員削減した薬学部は、志願者が101名→153名へと1.5倍に増やした<sup>19)</sup>。定員削減の良い効果とみられる。

---

18) この点は、拙著『松山商大四十年史』（愛媛新聞サービスセンター、2022年）参照。

19) 『学内報』第423号、2012年3月。同第425号、2012年5月。

表2 2012年度一般入試Ⅰ期日程

	募集人員	志願者	(前年)	合格者	実質競争率
経済学部	30名	436名	(617名)	143名	3.03
経営学部	20名	432名	(612名)	131名	3.29
人文英語	10名	157名	(227名)	77名	2.03
社会	10名	223名	(373名)	75名	2.96
法学部	20名	191名	(323名)	77名	2.47
文系合計	90名	1,439名	(2,152名)	503名	2.85
薬学部	40名	153名	(101名)	102名	1.49
総計	130名	1,592名	(2,253名)	605名	2.62

センター利用入試の募集人員は、文系は変化なかったが、薬学部は30名→10名に減らした。

結果は次の通りである<sup>20)</sup>。文系は経済が増やしたが、他は減らし、全体で1,664名→1,506名へ、158名、9.5%減少し、実質競争率も大きく落ち込んだ。他方、薬学部は定員を減らしたにも関わらず、志願者は118名→140名へと、22名、18.6%も増えた。定員削減の良い効果であろう。

表3 2012年度センター利用入試・前期日程

	募集人員	志願者	(前年)	合格者	実質競争率
経済学部	20名	487名	(418名)	332名	1.47
経営学部	25名	499名	(644名)	326名	1.52
人文英語	10名	128名	(145名)	108名	1.19
社会	15名	203名	(259名)	158名	1.28
法学部	15名	189名	(198名)	160名	1.18

20) 『学内報』第423号、2012年3月。

文系合計	85名	1,506名	(1,664名)	1,084名	1.39
薬学部	10名	140名	(118名)	102名	1.37
総計	95名	1,646名	(1,782名)	1,186名	1.39

2月2日、岡山勇一言語コミュニケーション研究科長の定年に伴う研究科長選挙が行なわれ、久保進（62歳，語用論）が選出された<sup>21)</sup>。任期は2012年4月から2年間。

2月11、12日の両日、2012年度の一般入試Ⅱ期日程が行なわれた。12日には、センター利用入試薬学部、スカラシップ入試も行なわれた。募集人員は、文系は変わらなかったが、薬学部が2012年度から定員削減のため、Ⅱ期の定員を15名→10名に減らした。

Ⅱ期日程の結果は次の通りである<sup>22)</sup>。文系各学部は全学部で志願者が大きく減り、前年の3,284名→2,627名へ、657名、20.0%も減少した。合格者は多めに出したので実質競争率は大きく低下した（2.34→1.63）。赤信号である。他方、薬学部は定員削減にも関わらず、Ⅰ期入試と同様に、28名→33名に少し増やした。

表4 2012年度一般入試Ⅱ期日程

	募集人員	志願者	(前年)	合格者	実質競争率
経済	173名	809名	(926名)	368名	1.76
経営	180名	755名	(959名)	381名	1.58
人英	45名	226名	(299名)	122名	1.48
人社	80名	463名	(592名)	203名	1.76
法	80名	374名	(508名)	206名	1.45
文系合計	558名	2,627名	(3,284名)	1,280名	1.63

21) 『学内報』第423号，2012年3月。

22) 『学内報』第423号，2012年3月。第424号，2012年4月。第425号，2012年5月。



薬	10名	33名	(28名)	16名	1.56
総計	568名	2,660名	(3,312名)	1,296名	1.63

なお、薬学部センター利用試験スカラシップ入試は、募集人員5名に対し、11名の志願者で3名が合格した<sup>23)</sup>

2012年度入試結果について、前入試委員長の松尾博史が『学内報』第425号(2012年5月)で詳細な分析をしている。薬学部の定員削減が高校に好感をもって受け止められ、志願者が増大し、2012年度入学者が増加に転じたことを、好感をもって論じている。松尾が論じた薬学部の志願者、合格者、入学者の数字を示せば次の通りである<sup>24)</sup>

#### 薬学部の入学者

	定員	志願者	合格者	入学者
2009年度	160名	246名	185名	90名
2010年度	160名	314名	210名	83名
2011年度	160名	300名	188名	73名
2012年度	100名	370名	252名	83名

2月16日、入江経済学研究科長の任期満了に伴う研究科長選挙が行なわれ、光藤昇(63歳、国民経済計算論)が選出された。任期は2012年4月1日から2年間。

2月24日、中嶋経済学部長の病気辞任に伴う学部長選挙が行なわれ、間宮賢一(57歳、理論経済学)が選出された<sup>25)</sup> 任期は2012年4月1日から2年間。

2月27日、2011年度の大学院Ⅱ期入試が行なわれた。経済は3名が受験し、3名が合格した。経営も3名が受験し、3名が合格した。言語はゼロ、社会も

23) 『学内報』第423号、2012年3月。

24) 『学内報』第425号、2012年5月。志願者は、推薦、センター、一般入試の合計。

25) 『学内報』第424号、2012年4月。

ゼロであった。博士は社会が2名が受験し、2名が合格した<sup>26)</sup>

3月3日、4日の両日、第97回薬剤師国家試験が行なわれた。本学の第1期生（2006年4月入学）が初めて受験した。結果は、受験生114名、合格者102名、合格率89.47%、全国66校中第38位で健闘した。ただ、薬学部第1期生は159名の入学であったので、6年次にはかなり減少したり、卒業できず受験資格が得られなかったりした。

3月8日、第5回全学教授会が開催された。審議事項は「松山大学教学会議規程の改正について」であった。

3月19日、午前10時より、ひめぎんホールにて、2011年度の松山大学大学院学位記、松山大学卒業式が行なわれた。経済371名、経営387名、人文英語107名、社会124名、法240名、薬学部114名が卒業し、大学院は経済修士2名、経営修士9名、言語コミュ修士2名、社会学修士2名が修了した。薬学部は初めて卒業生を出した。6年前の入学者が159名であったので、卒業率は71.7%で、3割近くが留年、退学していた。教学上深刻な問題であろう。

森本学長は式辞で、「これまでに養成してきた人間力、生きる力をもって将来の難題を乗り越えて、たくましく活躍して下さい。年月の経過とともに変化する環境を的確に把握し、この環境変化に適時に対応しながら社会のために貢献してください」と励ました<sup>27)</sup>それは次の通りである。

「今年の冬は寒さが特に厳しく、東日本大震災によって全国的に迫られた節電からも、一層寒い冬であったと感じられたことでしょう。寒く感じられても、日差しは日々強くなり、着実に春が近づいて、いよいよ皆さんが学び舎から巣立つ日を迎えました。この巣立ちの記念すべき日に、多数のご来賓ならびに保護者の皆様のご臨席を賜り、平成二十三年度松山大学・大学院学位記・卒業証書・学位記授与式を盛大に挙げてまいりますこと

26) 『学内報』第424号、2012年4月。

27) 同。

は、本学の光栄とするところであり、教職員を代表して心から御礼申し上げます。

修了生および卒業生の皆さん。ご修了・ご卒業おめでとうございます。所定の課程を修めて、特に薬学部においては六年間の長期にわたる課程を修め、本日こうしてめでたくご修了、ご卒業の日を迎えられたことに対して、心からお慶び申し上げます。また、これまで成長を見守ってこられた保護者の皆様におかれましても、本日の晴れ姿をご覧になって、さぞかしお喜びになり、安堵なされているものと拝察し、心からお慶び申し上げます。

さて、修了生および卒業生の皆さん、皆さんが入学した折りにも説明しましたが、本日の卒業式においても松山大学の歴史と教学理念としての校訓「三実」、すなわち、「真実」、「実用」、「忠実」の精神について述べておきたいと思います。これは、皆さんが本学出身者として誇りをもち、さらに校訓「三実」の精神を生かして実社会において大いに活躍していただきたいと願って行っているのです。本日もこの二点について、まず、お話しておきたいと思います。

松山大学は大正十二年〔一九二三年〕に開校した旧学制による松山高等商業学校がその始まりです。本校は、松山市出身で、日本初の工業用革ベルトの開発を遂げて製革業において成功し、大阪産業界の雄となり、世間からは「東洋の製革王」と呼ばれ、また、NHKのスペシャルドラマで注目されている司馬遼太郎著「坂の上の雲」に登場する秋山好古と親交のあった新田長次郎〔雅号温山〕、当時の松山市長であり、俳人正岡子規の叔父に当たる加藤恒忠〔雅号拓川〕、教育家であり、山口高等中学校長、大阪高等商業学校長、北予中学〔現県立松山北高等学校〕校長になられた加藤彰廉らの協力によって設立されました。長次郎翁は、高等商業学校設立の提案に賛同し、学校の運営には自らは関わらないことを条件に、設立資金として巨額の私財を投じて、私立の高商としては全国で三番目となる松山

高等商業学校を創設しました。また、本校以外にも明治四十四年〔一九一一年〕大阪市浪速区栄町に経済的に恵まれない子弟の教育のため有隣〔隣〕尋常小学校を設立し、学校運営経費ばかりか生徒の学用品や衣服等まで支給しながら約十年間経営した後、大阪市に寄贈されました。このように温山翁は製革業やその関連事業の成功を自分だけのものにするのではなく、教育や文化の発展のために還元され、広く社会貢献をされました。現在、文京町キャンパス内に、感謝の意を込めて、三恩人としてそれぞれの胸像を設置しています。

松山高等商業学校は昭和十九年に松山経済専門学校と改称し、第二次世界大戦後の学制改革により昭和二十四年に商経学部〔現、経済学部、経営学部〕を開設して松山商科大学となり、その後、大学院経済学研究科、人文学部、大学院経営学研究科、法学部を順次開設して文系総合大学となり、平成元年〔一九八九年〕に校名を変更して松山大学となりました。平成十八年には五番目の学部である理系の薬学部と三番目の大学院である大学院社会学研究科を開設して、本学は名実共に総合大学となりました。さらに平成十九年には四番目の大学院である大学院言語コミュニケーション研究科英語コミュニケーション専攻を開設して、教育研究体制をさらに充実させました。そして、薬学部設置以来六年が経過し、今日めでたく、薬学部第一期生を送り出すことになり、薬学部設置に係わったものの一人として感慨無量です。

松山大学の教学理念は、初代校長加藤彰廉が提唱し、第三代校長田中忠夫によってその意義が確立された「真実」「実用」「忠実」の三つの実を持った校訓「三実」の精神です。真実とは「真理に対するまことである。皮相な現象に惑溺しないで進んでその奥に真理を探り、枯死した既成知識に安住しないでたゆまず自ら真知を求める態度である。」と、実用とは「用に対するまことである。真理を真理のままに終わらせないで、必ずこれを生活の中に生かし社会に奉仕する積極進取の実践的態度である。」と、忠実

とは、「人に対するまことである。人のために図っては己を虚しうし、人と交わりを結んでは終生操を変えず自分の言行に対してはどこまでも責任をとらんとする態度である。」と説明されています。この校訓「三実」の精神は次のように解釈できます。

『真実』および『実用』によって知育における指針を示して、教育研究においては真理を探究することはもちろんのこと、その真理を日々の生活や仕事の中に応用できるものにするのが重要であることを説いています。すなわち、教育研究活動は実学志向で行われるべきであると考えられています。

『忠実』によって徳育（道德教育）における指針を示して、人に対しては誠実でなければならないこと、自分の言動については責任を持つことが大切であることを説き、対人関係のあり方、ないしは社会の一員としてとるべき態度を説いています。『忠実』の精神に基づいて行動すれば自ずと信用・信頼関係が生まれ、特に組織活動においては、信用・信頼関係があれば大いに能力を発揮できます。それゆえ『忠実』の精神は、組織の一員として、さらにはリーダーとして活躍するための必要条件であり、人間関係を大切にして信用・信頼される人格になることが重要であることを説いた人格形成のための精神です。

このように校訓「三実」の精神の解釈から分かるように、本学の教育の目的は、今日でいう「人間力」の養成にあるのです。近年、よく「人間力」の養成の必要性が叫ばれ、キャリア教育が行われることになりましたが、本学は創立当初から一貫して「人間力」「生きる力」を育む教育を実施してきたのです。

本年は、創立九十年目になり、来年の十月二十二日には九十周年記念式典を挙行する予定としておりますが、これまでに社会に送り出した卒業生は六万六千人を超え、特に経済界を中心に、全国的に活躍し、高い評価を得てきました。これも卒業生の皆さんが、校訓「三実」の精神を大切に

て活躍した結果であり、これが松山大学の伝統になっていると確信しています。卒業生の皆さんは、これまで松山大学で養成され身に付けた「人間力」で実社会で先輩たちに続いて大いに活躍してください。

皆さんは、政治も経済も不安定な中で教育を受け、東日本大震災後の混乱した状況の中で就職活動をしなければならないという苦しい状況に置かれてしまいました。この一年間で自然災害への意識は一変したことでしょう。東日本大震災を他人事とせず、今後も自然災害は必ずあるものと想定してそれに備え、校訓「三実」の精神で困難を乗り越えてください。夢があればどんな困難にも耐え、どんな努力もいとわないでしょう。「意志あるところ道あり」の精神でみずからの人生を拓き、困難を乗り越えて、夢を実現できるよう努力してください。

夢の実現と言えば、本年度においても、嬉しいニュースがいくつかありました。愛媛県職員上級職として薬学部学生五名を含む十二名が採用内定、大学院生が公認会計士試験に合格、司法試験にも過年度卒業生が前年に続き合格するなど、これまでの勉学の成果を挙げることができました。また、サークル活動において本年も四国インカレでの男女アベック総合優勝、ボート部の日本インカレ・シングルスカルでの優勝などの活躍が見られましたし、創部四年目の女子駅伝部が第二十九回全日本大学女子駅伝対校選手権大会で五位に入賞し、二年連続でシード権を獲得しました。このように文武両面において素晴らしい成果をあげることができています。これこそ皆さんが目標・目的を持って努力すれば成果を挙げることができる証ですから、皆さんの新たな旅立ちに際して、大志を抱き、自信を持って実社会で活躍して頂きますよう心から希望します。また、まだ結果は出ていませんが、三月三日、四日の両日に薬剤師国家試験が実施されました。受験した薬学一期生の皆さんが合格して、皆さんや薬学部関係者の皆さん、さらには学外の実務家実習でご指導をいただいた諸先生のこれまでのご努力やご苦勞が報われますよう心より祈念しております。

皆さんご承知の通り大学をとりまく環境は年々厳しくなっておりますが、皆さんが活躍する実社会の環境も厳しいものと思われまます。少子高齢化、円高による産業の空洞化、経済のグローバル化、温暖化や東日本大震災のような自然災害の影響によって益々厳しくなるものと思われまます。けれども皆さんは、これまでに養成してきた人間力、生きる力をもって将来の難題を乗り越えてたくましく活躍してください。年月の経過とともに変化する環境を的確に把握し、この環境変化に適時に適応しながら社会のために貢献してください。

今や大学は財務情報ばかりか、教育情報の開示も求められ、財務力、教育力、就職力などによって総合評価される時代となりました。皆さんが卒業生として実社会で大いに活躍することによって、大学の評価は大いに高まります。社会人として思う存分ご活躍いただいて、大学発展のためにもご支援いただけることを期待します。特に薬学部の卒業生の皆さんはこれまでにない新戦力であり、皆さんの活躍が薬学部の将来を左右するといっても過言ではありませんから、一騎当千のご活躍を期待しております。

これから皆さんは卒業と同時に、卒業生・修了生によって組織される「温山会」の会員となります。温山会は、北は北海道から南は九州まで全国的に組織され、活発に活動しています。皆さんも温山会の一員として就職先の地域にある温山会支部総会に出席して親睦を深め、人間関係の充実を図って下さい。今後も温山会活動を通じて皆さんと協力関係が築けることを期待しております。

最後になりましたが、皆さんが夢や希望を持って、今後も地域・社会の発展のために、さらに世界の発展のため、益々ご健勝でご活躍いただきますように祈念して、式辞といたします。

平成二十四年三月十九日

松山大学

学長 森本 三義 ]<sup>28)</sup>

3月31日、経済学部では、岩橋勝（日本経済史）、岩林彪（比較経済システム論）、宍戸邦彦（経済統計論）等が退職した（70歳）。経営学部では八木功治（実用英語）、三光寺由実子（簿記原理）、関一（企業論）等が退職した。人文学部では、岡山勇一（イギリス文化文学研究）、春日キスヨ（家族社会学）、法学部では東條武治（環境法等）、田口武史（ドイツ語）、薬学部では、加茂直樹（生物、物理化学）、葛谷昌之（薬学概論）、榊田隆宏（英語）、山本重雄（くすりを知る）、吉田隆志（植物と健康）、等が退職した<sup>29)</sup>

## 7) 2012（平成24）年度

森本学長・理事長6年目、最後の年である。

本年度の校務体制は、副学長は墨岡学（2011年1月6日～2012年12月31日）、安田俊一（2008年6月26日～2012年12月31日）が続けた。経済学部長は新たに間宮賢一（2012年4月～2014年3月）が就任し、また経営学部長も新たに浅野剛（2012年4月～2014年3月）が就任した。人文学部長は奥村義博（2010年4月～2014年3月）が続けた。法学部長は新たに村田毅之（2012年4月～2014年3月）が就任し、また薬学部長も新たに松岡一郎（2012年4月～2014年3月）が就任した。短大学長は清野良栄（2009年4月～2015年3月）が続けた。大学院経済学研究科長は光藤昇が新たに就任した（2012年4月～2014年3月）、経営学研究科長は浅野剛（2012年4月～2014年3月）が新たに就任した。経営学部長との兼務であった。社会学研究科長は小松洋（2011年4月～2013年3月）が続けた。言語コミュニケーション研究科長は新たに久保進（2012年4月～2014年3月）が就任した。図書館長は藤井泰（2011年1月～2012年12月31日）、総合研究所長は中村雅人（2011年1月～2012年12月31日）、副所長は倉沢生雄（2011年1月～2012年12月31日）が続けた。教務委員長は明照博章（2011年4月～2013年3月）が続けた。入試委員長は

---

28) 松山大学総務課所蔵。

29) 『学内報』第424号、2012年4月。



新たに渡辺孝次が就任した（2012年4月～2013年3月）。学生委員長は松本直樹が続けた（2011年5月1日～2014年3月）。

学校法人面では、常務理事は、事務局長で理事の西原友昭（2010年4月～2017年3月）、事務部長で理事の岡村伸生（2010年4月～2014年12月31日）、副学長で理事の墨岡学（2007年1月～2012年12月31日）、評議員理事の松浦一悦（2011年1月14日～2014年12月31日）が続けた。理事は副学長の墨岡学、事務局長の西原友昭、事務部長の岡村伸生、評議員理事は、田中哲、松浦一悦が続けた（葛谷昌之の退職で1人欠）。設立者から新田元庸、温山会から麻生俊介、今井琉璃男、野本武男、学識者から一色哲昭、大塚潮治、水木儀三であった。監事は、新田孝志（2008年1月1日～）、金村毅（2009年6月～2015年5月31日）、島本武（2011年1月1日～2014年12月31日）であった。評議員は、教育職員は、今枝法之、河瀬直美、川東埡弘、鈴木茂、増野仁、松浦一悦、松尾博史の8名、事務職員は岡田隆、浜岡富雄の2名、事務局長及び部長は西原友昭、岡村伸生、藤田厚人、高原敬明、高尾義信の5名。後、副学長、学部長、短大学長の8名、温山会の7名、学識者の11名であった<sup>1)</sup>。

4月1日、本年も次のような新しい教員を採用した<sup>2)</sup>。

#### 経済学部

- 井上 正夫 1964年生まれ、京都大学大学院経済学研究科博士後期課程。講師として採用。経済史概論等。
- 櫻本 健 1979年生まれ、立教大学大学院経済学研究科博士後期課程。講師として採用。経済統計方法論等。
- 柳原 剛 1975年生まれ、京都大学大学院経済学研究科博士後期課程。講師として採用。社会経済学等。

1) 『学内報』第424号、2012年4月。

2) 同。

## 経営学部

- 上羽 博人 1957 年生まれ，日本大学大学院商学研究科博士後期課程。教授として採用。貿易論等。
- 成瀬 一明 1952 年生まれ，総合研究大学院複合科学研究科博士後期課程。教授として採用。ソフトウェア工学等。
- 小木麻里子 1979 年生まれ，大阪大学大学院言語文化研究科博士後期課程。准教授として採用。英語。
- 真野 剛 1977 年生まれ，広島大学大学院文学研究科博士後期課程。准教授として採用。英語。

## 人文学部

- 大倉 祐二 1974 年生まれ，大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程。准教授として採用。社会学等。

## 法学部

- 銭 偉栄 1962 年生まれ，法政大学大学院社会科学研究科博士後期課程。准教授として採用。民法等。
- 平松 智久 1977 年生まれ，九州大学大学院人文科学府博士後期課程。講師として採用。ドイツ語。

なお，経済学部で新特任で採用されていた熊谷太郎（経済政策等）が専任になった。

4 月 3 日，午前 10 時より 2012 年度の松山大学大学院・松山大学入学式が行なわれた。経済が 416 名，経営が 397 名，人文英語が 112 名，同社会が 134 名，法学部が 222 名，薬学部が 83 名入学した。大学院は経済学研究科修士課程が 2 名，経営学研究科が 1 名，言語コミュニケーション研究科が 2 名，社会学研究科が 2 名入学した。博士課程はいずれもいなかった<sup>3)</sup>。薬学部は 83 名で，前

---

3) 『学内報』第 426 号，2012 年 6 月。

年度の最悪の72名を11名上回った。それは、前年に「薬学部総括」をし、「再建方策」のために尽力した結果であると評価される。しかし、2012年度からの実施の定員100名から見れば、大きく下回っていたので、まだ、再建には至っていない。

森本学長は式辞で、本学の歴史や伝統、創立の三恩人の高い志、卒業生の活躍、部活動の輝かしい成績、校訓三実などを紹介し、個人を取り巻く環境はそれぞれ異なりますが、決して諦めないという強い意志をもって松山大学で未来を拓き、夢を実現してください、と激励した<sup>4)</sup>それは次の通りである。

「本日、新入生の皆さんを本学に迎えるに当たり、多数のご来賓ならびに保護者の皆様のご臨席を賜り、平成二十四年度松山大学大学院・松山大学入学宣誓式をかくも盛大に挙行できますことは、本学の光栄とするところであり、教職員を代表して心から御礼申し上げます。

新入生の皆さん、ご入学おめでとうございます。皆さんの入学に対して心から歓迎の意を表します。保護者の皆様におかれましては、本日ご入学を迎えられ、感慨無量でさぞかしご安堵なされているものと拝察し、心からお慶び申し上げます。

さて、新入生の皆さん、本学に入学のうへは、本学の学生として自信と誇りを持ち、勉学や課外活動などに励んでいただきたいと願って、最初に松山大学の歴史と教学理念である校訓『三実』すなわち「真実」、「実用」、「忠実」の精神をお話しておきたいと思います。

松山大学は大正十二年〔一九二三年〕に開校した旧学制による松山高等商業学校がその始まりです。本校は、松山市出身で、日本初の工業用革ベルトの開発を遂げて製革業において成功し、大阪産業界の雄となり、世間からは「東洋の製革王」と呼ばれ、また、NHKスペシャルドラマで注目

---

4) 『学内報』第425号、2012年5月。

された司馬遼太郎著「坂の上の雲」に登場する秋山好古と親交のあった新田長次郎〔雅号温山〕と、当時の松山市長であり、俳人正岡子規の叔父に当たる加藤恒忠〔雅号拓川〕、そして、山口高等中学校長、大阪高等商業学校長、北予中学〔現愛媛県立松山北高等学校〕校長になられた教育家の加藤彰廉らの協力によって設立されました。新田長次郎は、高等商業学校設立の提案に賛同し、学校の運営には自らは関わらないことを条件に、設立資金として巨額の私財を投じて、私立の高商としては全国で三番目となる松山高等商業学校を創設しました。また、本校以外にも明治四十四年〔一九一一年〕大阪市浪速区栄町に経済的に恵まれない子弟の教育のため有隣〔隣〕尋常小学校を設立し、学校運営経費ばかりか生徒の学用品や衣服等まで支給しながら約十年間経営した後、大阪市に寄贈されました。このように新田長次郎は製革業やその関連事業の成功を自分だけのものにするのではなく、教育や文化の発展のために還元され、広く社会のために貢献されたのです。本学では、この新田長次郎、加藤恒忠、加藤彰廉の三名を三恩人と称し、現在、文京キャンパス内に、感謝の意を込めて、それぞれの胸像を設置しています。

さて、本学の前身である松山高等商業学校は、昭和十九年に松山経済専門学校と改称し、第二次世界大戦後の学制改革により、昭和二十四年に商経学部〔現、経済学部、経営学部〕を開設して松山商科大学となり、その後、大学院経済学研究科、人文学部、大学院経営学研究科、法学部を順次開設して文系総合大学となり、平成元年〔一九八九年〕に校名を変更して松山大学となりました。そして平成十八年〔二〇〇六年〕には、五番目の学部である理系の薬学部と三番目の大学院である大学院社会学研究科を開設して、本学は名実共に総合大学となりました。さらに平成十九年には、四番目の大学院である大学院言語コミュニケーション研究科を開設して、教育研究体制をさらに充実させました。今春、薬学部においては、第一期卒業生を社会に送り出し、念願の薬剤師を輩出することができました。

松山大学の教学理念は、初代校長加藤彰廉が創唱し、第三代校長田中忠夫によってその意義が確立された『真実』『実用』『忠実』の三つの実を持った校訓『三実』の精神です。『真実』とは「真理に対するまことである。皮相な現象に惑溺しないで進んでその奥に真理を探り、枯死した既成知識に安住しないでたゆまず自ら真知を求める態度である。」と、また実用とは「用に対するまことである。真理を真理のままに終わらせないで、必ずこれを生活の中に生かし社会に奉仕する積極進取の実践的態度である。」と、そして『忠実』とは、「人に対するまことである。人のために図っては己を虚うし、人と交わりを結んでは終生操を変えず自分の言行に対してはどこまでも責任をとらんとする態度である。」とそれぞれ説明されています。この校訓『三実』の精神は次のように解釈できます。

『真実』および『実用』によって知育における指針を示して、教育研究においては真理を探究することはもちろんのこと、その真理を日々の生活や仕事の中に応用できるものにするのが重要であることを説いています。すなわち、教育研究活動は実学志向で行なわれるべきであると考えられています。

そして、『忠実』によって徳育（道德教育）における指針を示して、人に対しては誠実でなければならないこと、自分の言動については責任を持つことが大切であることを説いて、対人関係のあり方ないし社会の一員としてとるべき態度を説いています。『忠実』の精神に基づいて行動すれば自ずと信用・信頼関係が生まれ、特に組織活動においては、信用・信頼関係があれば大いに能力を発揮できます。それゆえ『忠実』の精神は、組織の一員として、さらにはリーダーとして活躍するための必要条件であり、人間関係を大切に信用・信頼される人格になることが重要であることを説いた人格形成のための精神です。

本年は、創立九十年目になりますが、この間に社会に送り出した卒業生は約六万六千人を超え、経済界を中心に全国的に活躍し、高い評価を得て

きました。これも卒業生の皆さんが校訓『三実』の精神を大切にして活躍してこられた結果であり、これが松山大学の伝統になっていると確信しています。皆さんも先輩に続いて大いに活躍できる人材となれるよう勉学に課外活動に励んでください。

次に、皆さんに悔いのない学生時代を過ごしていただくために、アドバイスしておきたいと思います。

まずは現状認識として、高等教育進学率は今や五十パーセントを超えて、高等教育はマス段階からユニバーサル段階になっていることを認識しておいてください。この段階においては、大学を卒業しただけでは十分な能力の証明にはならず、特に就職活動においてはセールスポイントとなる資格や活動実績を示す必要があるのです。本学は就職に強い大学と評価されてきましたが、今春の本学卒業生の中にも就職先が決まらなかった者もいました。その人たちの多くは卒業後の就職を意識せず、何とかなるだろうと日々の学園生活を単に楽しく過ごしてしまった結果であろうと思います。卒業が近づいても内定をいただけない状況に至ってやっと、もっと早く勉強をすべきだったとか、資格を取得しておけばよかったなどと反省する場合があります。望ましい職業観を育成し、職業意識を高めるため、本学でもキャリア教育を行ないますが、まずは皆さんそれぞれが本学卒業後どのようにして社会において活躍したいのかを可能な限り早く考えて、夢や希望を持ってください。次に、夢や希望を達成するためには、在学中に何について勉強すべきか考えてください。それが分かれば、さらに夢実現のために学生時代に達成すべき目標を立てて、それを達成すべくプラン・ドゥー・チェック・アクションのマネジメントサイクルで自己管理してください。授業および授業外のサークル活動を通じて、皆さんの夢を叶えるため我々教職員も可能な限り努力します。人は物事がうまく運ばない時、その原因を外部に求め環境が悪いと思いがちです。個人を取り巻く環境はそれぞれ異なりますが、与えられた環境は制約条件と考え、その下で最適

な行動をとってください。各人の努力によって制約条件を取り除くことも可能になるかもしれません。「決して諦めない」という強い意志を持って、松山大学で未来を拓き、夢を実現してください。

これまでの本学の長い歴史においては、努力の結果、夢を実現できたり、目標を達成して成果をあげることができた卒業生は多数います。近年においても司法試験、公認会計士試験、国家公務員一種採用試験など難関試験に合格して夢を実現した人もいます。また、薬学部では第一期卒業生を輩出し、薬剤師試験に多数合格し、薬剤師としての活躍を始めています。さらにサークル活動においても、スノーボード・ハーフパイプの種目における世界的な活躍や女子駅伝部の全日本女子駅伝対校選手権大会での活躍などのように大いに成果をあげ、今や「日本一」、「世界一」を目指すまでになりました。先輩たちはこのように成果をあげていますから、皆さんも先輩に続いて校訓「三実」の精神で頑張ってください。

皆さんは今日から本学の学生として活動を始めることになりました。入学当初は誰しも不安はあります。何か相談したいことがあれば、気楽に学生支援室を尋ねて、アドバイスを受けるとういでしょう。東日本大震災を経験して、自然災害も心配になりました。本学においては、大地震が発生した時に適切な対応をとっていただくために、大地震対策マニュアルを配布します。必ず身に付けて、利用してください。東日本大震災を他人事とせず、自然災害は起こるものと想定してそれに備え、学生生活を送ってください。早く本学での大学生活が軌道に乗るよう願っております。

最後になりましたが、将来、卒業を迎えた時に、松山大学で勉学やサークル活動に励むことができたと良かったと満足することができますように、さらに夢や希望を持って実社会に旅立つことができますよう祈念して、式辞といたします。

平成二十四年四月三日

松山大学

学長 森本三義 ]<sup>5)</sup>

5月1日発行の『学内報』第425号（2012年5月）に、2012年度の「事業計画及び予算の概要」が掲載されている。そこでの重点事業は、中・長期経営計画の検討と創立90周年事業の準備であった。そして、本年度も「中四国ナンバーワン」「西日本屈指の私立総合大学」を打ち出していた<sup>6)</sup>。

6月1日、2013（平成25）年度の入試要項、各学部の入試制度別募集人員の説明会が行なわれた<sup>7)</sup>。

6月7日、2012年度第1回全学教授会が開催された。審議事項はなく、報告事項として、2011年度決算および事業報告、2012年度事業計画及び予算について、2013年度大学入試要項について等が報告された。事業報告では、デリバティブ取引における運用損が報告され、できるだけ早い段階で解約する旨報告された。

7月1日発行の『学内報』第427号（2012年7月）に「2011（平成23）年度 決算について」が出されている。そこで、資金運用面で、時価が貸借対照表計上額を超えないものとして、地方債・社債・株式の時価損失が1億6,001万4,931円、仕組債が5億7,481万3,000円、合計7億3,487万7,931円の時価損失が出ている。また、デリバティブ取引（金利スワップ取引1件、6.4億円）で、2億1,393万810円の評価損失を出している。そして、デリバティブの運用収入は640万円、運用損失が7,180万1,024円となっていた<sup>8)</sup>。資金運用の失敗、寄附行為違反であった。

8月1日発行の『学内報』第428・429号（2012年8月）に、常務理事松浦一悦（総務、中長期経営計画担当）が、教育・研究施設の改築計画について、報告している。それによると、老朽化している3号館（築50年）、研究センタ

5) 松山大学総務課所蔵。

6) 『学内報』第425号、2012年5月。

7) 『学内報』第426号、2012年6月。

8) 『学内報』第427号、2012年7月。



一（築46年）、1号館（築42年）の改築をあげ、樋又キャンパスに、新館を建設し、研究センターと3号館、1号館の教室を移転させること、また、公開講座用の教室や多目的ホール、カフェテリアの建設を検討していることを明らかにしている<sup>9)</sup>

9月27日、森本理事長は、松山赤十字病院より看護学校を引き受けてほしいとの要望に応え、検討の結果、次のような理事長案を示した。

- ①入学定員：100名（予算定員110名）
- ②学生生徒等納付金：140万円
- ③教員：24名（教授7名、准教授2名、講師5名、助教5名、助手5名）
- ④職員：5名

しかし、その結論は次の学長・理事長に先のばしにした。

9月30日、2013年度の大学院第I期入試が行なわれた。経済学研究科は学内特別選抜者が1名受験し、1名合格した。一般入試はいなかった。経営学研究科は受験者はいなかった。言語コミュニケーション研究科は一般選抜で2名が受験し、2名が合格した。社会学研究科は受験者はいなかった<sup>10)</sup>

10月1日発行の『学内報』第430号（2012年10月）に、法学部准教授の服部寛が「田中忠夫と三実主義についての一試論(1)」をあらわし、昭和16年の田中忠夫の三実主義の定式化について、素朴な疑問を呈している。それは、ア、加藤彰廉が提示した三実を〈まこと〉という言葉をもって定式化する必要性は論理的には存在しないこと、イ、当時カトリックであった田中がなぜ〈まこと〉というすぐれて日本的な言葉をもちいて定式化したのか、その必然性はどこにあるのか、という疑問である。そのうち、イについて、田中が定式化した背景

---

9) 『学内報』第428・429号、2012年8月。なお、後に3号館のみは解体せずに、事務所（学生部）に転用した。

10) 『学内報』第432号、2012年12月。

として、軍部からの批判（教育勅語以外に校訓はいらない）に応えたものであることを確認した上で、「まこと」という用語をわざわざ使用する必然性はない、と論じ、服部は文部省が昭和12年に『国体の本義』を発行し、そこで〈まこと〉は日本の国民精神の根底にあるものとして指摘しており、それを踏まえて、田中が三実主義の定式化に当たり、使用したのではないかと推測している。そして、私見として「田中の定式化は、体制から距離を置く意図を以て行われたが、少なくとも外見的には、当時の日本的な要素を纏うものであり、この点ではアンビバレントな性格を有するものであった」と述べている<sup>11)</sup>

11月1日発行の『学内報』第431号（2012年11月）に服部寛が「田中忠夫と三実主義についての一試論<sup>2)</sup>」をあらわし、そこで、三実主義は15年戦争と無関係だったわけではない、大東亜共栄圏建設にとっての三実主義の意義、昭和18年の高商創立20周年の記念式典における式辞での三実主義の紹介をしながら、田中の三実主義は、戦時期の趨勢に対する防波堤の役割をはたしたのではなく、むしろ（軍国主義の）時代に巻き込まれたことから逃げられなかったと論じ、それは、三実主義の形式的性格、無規定性にあると、指摘している<sup>12)</sup>

服部は、2011年4月に赴任したばかり若い准教授である（1980年生まれ）。私はこの論考に感心した。赴任したばかりの人が本学の三実主義について関心を持ち研究しているとは正直驚いた。私もこの論文が契機になって、長年大学に務めている者として、怠慢、不明を反省し、学校の歴史、三実主義について研究しなければと痛感したものであった。

10月28日、女子駅伝部が仙台で行なわれた第30回全日本大学女子駅伝対校選手権大会において、4位入賞を果たした。快挙であった<sup>13)</sup>

11月1日、法人関係で、理事に学識者から山下雄輔が就任した<sup>14)</sup>

11) 『学内報』第430号、2012年10月。

12) 『学内報』第431号、2012年11月。

13) 『学内報』第432号、2012年12月。

14) 同。

11月10、11日の両日、2013年度の推薦・特別選抜入試が行なわれた。10日が経済・経営、11日が人文・法・薬学部であった。大きな変化は経済と経営がアドミッションズオフィス入試を廃止したことである。経済は、指定校は105名で変わらず、一般公募は20名→25名に増やした。経営は指定校を50名→55名に増やし、また、成績優秀者を15名、資格取得者を15名に増やした。人英は指定校を25名→20名に減らした。人社は変わらず、法学部は一般公募を50名→55名に増やし、総合学科を10名→5名に減らした。薬は変化なかった。結果は次の通りであった<sup>15)</sup>

表1 2013年度推薦・特別選抜入試

	募集人員	志願者	合格者
経済学部 (指定校制)	105名	140名	139名
(一般公募)	25名	136名	50名
(各種活動)	12名	8名	8名
(資格取得者)	若干名	1名	1名
(社会人)	若干名	1名	1名
経営学部 (指定校制)	55名	54名	54名
(一般公募)	22名	102名	60名
(成績優秀者)	15名	22名	22名
(各種活動)	30名	32名	31名
人文英語 (指定校制)	20名	11名	11名
(資格取得者)	若干名	16名	16名
(総合学科卒業生)	若干名	4名	2名
社会 (指定校制)	15名	29名	29名
(社会人)	若干名	1名	1名

15) 『学内報』第433号、2013年1月。

法学部	（指定校制）	20名	23名	23名
	（一般公募制）	55名	158名	92名
	（各種活動）	10名	11名	11名
	（総合学科卒業生）	5名	22名	6名
薬学部	（指定校制）	15名	18名	18名
	（一般公募）	15名	35名	33名

2012年度の秋期の「松山大学コミュニティ・カレッジ」において、「松山大学90年史話」が企画され（コーディネート・川東）、次のような日程・講師、テーマにて開催された。

- 第1回 10月18日、平田桂一「企業家・新田長次郎と松山高商の誕生」
- 第2回 10月25日、平田桂一「建学の三恩人とその継承者たち」
- 第3回 11月1日、神森 智「自分史と松山商大を語る」
- 第4回 11月8日、宮崎 満「管見 成長・発展する松山商大・松山大学時代－市場空狭小化の中での拡大と競争－」
- 第5回 11月15日、神森 智「私の遺言 松山大学を語る」
- 第6回 11月22日、清野良栄「輝かしい伝統の上に輝く松山短期大学を目指して－社会人教育の今昔－」

講演内容は、いずれもすぐれたもので、松山大学から後に、テープでおこされ、「特別講座 松山大学90年史話」として、簡易製本された。

2012年度末で、森本学長の任期が満了となるので、松山大学学長選考規程に基づき、選挙管理委員会が組織された（委員長は出石文男）。

10月1日、学長選挙の公示がなされた。選挙権者は253名（教員149名、職員104名）であった。

10月15日、第1次投票が行われた。

- |         |     |
|---------|-----|
| 1. 選挙権者 | 253 |
| 2. 棄権   |     |
| 3. 投票総数 |     |
| 4. 無効   |     |
| 5. 有効投票 |     |
| 村上宏之    | 76  |
| 平田桂一    | 61  |
| 増野 仁    | 41  |
| 妹尾克敏    | 16  |
| 以下略。    |     |

よって、村上、平田、増野の上位3名が第2次投票の候補者となった。村上候補は1956年3月生まれ、56歳、経営学部教授、元経営学部長。平田候補は1947年1月生まれ、65歳、経営学部教授で前経営学部長、前経営学研究科長。増野候補は1947年10月生まれ、65歳、経済学部教授であった。

11月6日、第2次投票が行なわれた。

- |         |                   |
|---------|-------------------|
| 1. 選挙権者 | 253               |
| 2. 棄権   | 13                |
| 3. 投票総数 | 240               |
| 4. 無効   | 4                 |
| 5. 有効投票 | 236               |
| 村上宏之    | 143 (教員 87 職員 56) |
| 平田桂一    | 73 (教員 30 職員 43)  |
| 増野 仁    | 20 (教員 17 職員 3)   |

よって、村上候補が有効投票の過半数及び教員の過半数を得て当選した。

12月6日、評議員会が開催され、審議事項は2012年度の更正予算が議題で、

その中で、スワップ取引について今期 6,875 万円の損失が計上されること、等が明らかになった。報告事項として、次期学長に村上宏之教授が任命された旨報告された。

12月31日、森本三義学長・理事長は退任した。

同日、副学長の墨岡学、安田俊一も退任した。また、学長任命の図書館長藤井泰、総合研究所長の中村雅人、副所長の倉沢生雄も退任した。また、寄附行為の規程により副学長の墨岡学は理事、常務理事も退任した。

## お わ り に

森本三義学長時代（在任：2007年1月1日～2012年12月31日）の松山大学の歴史に関し、功績、問題および特記すべき事項についてまとめておこう。

第1に、疑義の多い人事を行なった。

例えば、学部長を理事長補佐に任命したり、副学長について、学部長経験者又は研究科長経験者で、博士号取得者であることが望ましいとの申し合わせがあるのにそれを守らなかったり、事務職で退職するひとのために、ポストを作ったりした。

第2に、2006年度に発足した薬学部について。

①薬学部は、予測に反し、志願者が集らず、初年度から定員割れが続き、苦難の連続であった。入試改革も行なったが、ほとんど効果はなかった。

②2011年からようやく薬学部の定員削減の検討をはじめ、10月末に、薬学部総括と再建方針を決め、2012年度から定員を160名→100名に削減した。本来ならばもっと早く、検討すべきであったが、ズルズル引きのばした、その責任は大きい。しかし、経営責任はとらなかった。

第3に、文系学部について。

文系学部も志願者減が続き、2009年度から新入試制度を導入した。それは、一般入試をⅠ期、Ⅱ期に分け、Ⅰ期入試（2科目入試）は早期

に実施し、早く合格を決めたい学生の要望に沿ったものであり、メインのⅡ期入試（従来通り3科目入試）では従来5日間行なった入試を2日間に短縮し、併願を奨励し、受験料を減額し、受験生の負担を軽減し、また、教職員の負担も軽減した。志願者が増え、一定の効果を上げたが、2009年度と2010年度の2年間だけで、長続きしなかった。2011年度以降は従来通り苦難が続いた。

第4に、南海放送跡地について。

2008年1月、南海放送跡の土地・建物を約12億円で購入した。それは時価評価に比して高い買物であった。しかも、教育施設としては使用できないにも関わらず建物つきで購入し、その解体費用も生じ高い買物となった。経営上の判断の誤りであった。

第5に、中長期経営検討委員会について。

2008年11月、中長期経営検討委員会を設置した。まず、南海放送跡地の利用について検討を行なった。そして、その後、2012年に、老朽化している3号館（築50年）、研究センター（築46年）、1号館（築42年）を壊し、樋又キャンパスに、新館を建設し、研究センターと3号館、1号館の教室を移転させ、また、公開講座用の教室や多目的ホール、カフェテリアを建設することを決めている。結局、中長期経営検討委員会は、経営の一部、施設の検討に終わったといえる。

第6に、大学ビジョンについて。

2009年11月の『学内報』で森本学長・理事長は「松山大学の教学理念及び経営ビジョンについて」を発表した。しかし、問題の多いものであった。

①教学理念のうち、校訓の表示について。校訓「三実主義」でなく、主義を取り、校訓「三実」を使用するようになった。式辞では2010年3月19日の卒業式から初めて「三実」を使用した。だが、それは、校訓の表示について本学の歴史的経緯を踏まえたものではなく、根拠

なき変更であった。

②経営ビジョンについて。中四国ナンバーワン、西日本屈指の私立総合大学を目指すスローガンを掲げた。しかし、それは大言壮語にすぎず、スローガンに終わった。

③総合大学に相応しい組織体制の構築について。学部の自立性・独立性、大学本部機能の強化、分権管理組織を採用する、などを述べたが、何もしなかった。

第7に、校訓「三実主義」の順序について。2011年3月18日の卒業式からそれまでの「真実・忠実・実用」の順序を「真実・実用・忠実」の順序に変更した。それは、事実誤認に基づくもので、根拠なき変更であった。

第8に、寄附行為違反の仕組み債の購入やデリバティブ取引（金利スワップ取引）を行なった。

①2007年3月の金利スワップ取引（13.5億円）は、1ドル90.2円を基準に、本学の受け取りは常に1%だが、円高になると、約10%の支払いという不利な契約を結んだ。

②2010年9月に、前神森理事長時代に契約した2件の金利スワップ（8億円、15億円）と森本理事長時代の金利スワップ（13.5億円）の3件解約するが、その際の解約金をチャラにするために、新たな金利スワップ取引（6.4億円）を締結した。しかし、それは、1ドル86円で契約したもので、円高の進行により、多大な損失を出した。

③そして、それらの経営責任をとらなかった。

第9に、2007年11月、東京オフィスを東京銀座8丁目のニッパビル6階に設置した。

第10に、2010年4月、内部監査室、周年事業計画準備室を設置した。しかし、校史「90年史」の準備はしなかった。

第11に、2010年4月、コミュニティ・カレッジを開始し、2012年4月、学生支援室を開設した。これらは、公約の実現であった。



第12に、部活動での活躍が見られた。卒業生の土佐礼子が2008年の北京オリンピックに出場した。また、創部して間もない女子駅伝部が活躍した。

第13に、森本氏は、苦勞人でがまん強く、ねばり強い性格の人であった。そして、1998年12月にはからずも理事に就任し、比嘉・青野・神森（第2次）学長を支え、2007年1月から学長・理事長に就任し、2012年12月末まで、実に14年間の長きにわたって本法人の役員を務めた功勞者である。1949年以来の松山商科大学・松山大学の歴史において、第7代学長・理事長の稲生晴（1969年5月～1985年12月、16年7カ月）に次ぐ長さである。共に卒業生であり、共に比較的若い時期に理事に就任し、本来研究者として最も専念しなければならない大切な時期に学校のために、研究を犠牲にして「滅私奉公（校）」した人であった。